

京都府埋蔵文化財情報

創刊号

創刊にあたって	1
昭和56年度発掘調査予定の遺跡	堤圭三郎 2
昭和55年度京都府下埋蔵文化財の調査	堤圭三郎 5
豊富谷丘陵遺跡の調査	松井忠春 12
近畿自動車道舞鶴線関係遺跡発掘調査概要	辻本和美 18
亀岡市篠窯跡群	水谷寿克 25
久世庵寺	近藤義行 31
恭仁宮跡の発掘調査について	中谷雅治・大槻真純 36
府下遺跡紹介 網野銚子山古墳・浜詰遺跡	編集部 42
センターの動向	46
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織及び職員一覧	47
受贈図書一覧	48

1981年9月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

豊富谷丘陵遺跡の調査



(1) 豊富谷丘陵全景（姫髪山から）

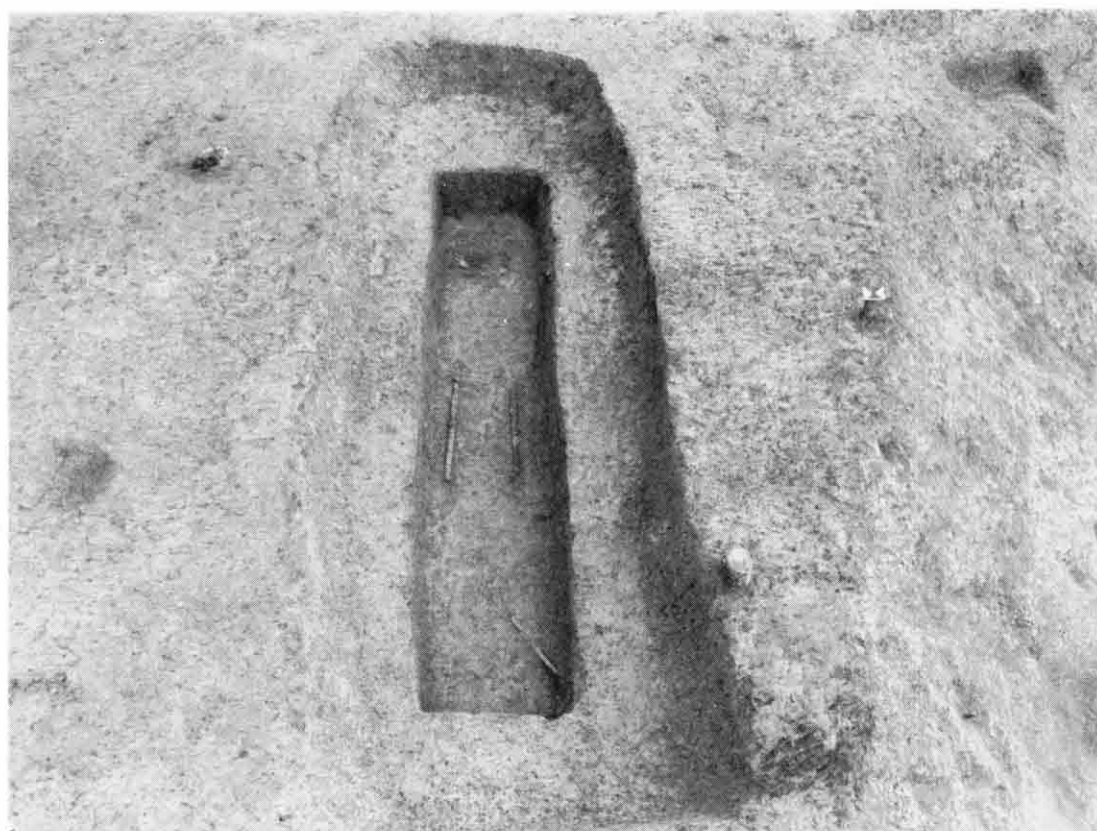


(2) Ⅲ区北尾根古墳群航空写真

豊 富 谷 丘 陵 遺 跡 の 調 査



(1) Ⅲ区南尾根古墳群全景



(2) ㊸論田11号墳主体部全景

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡発掘調査概要

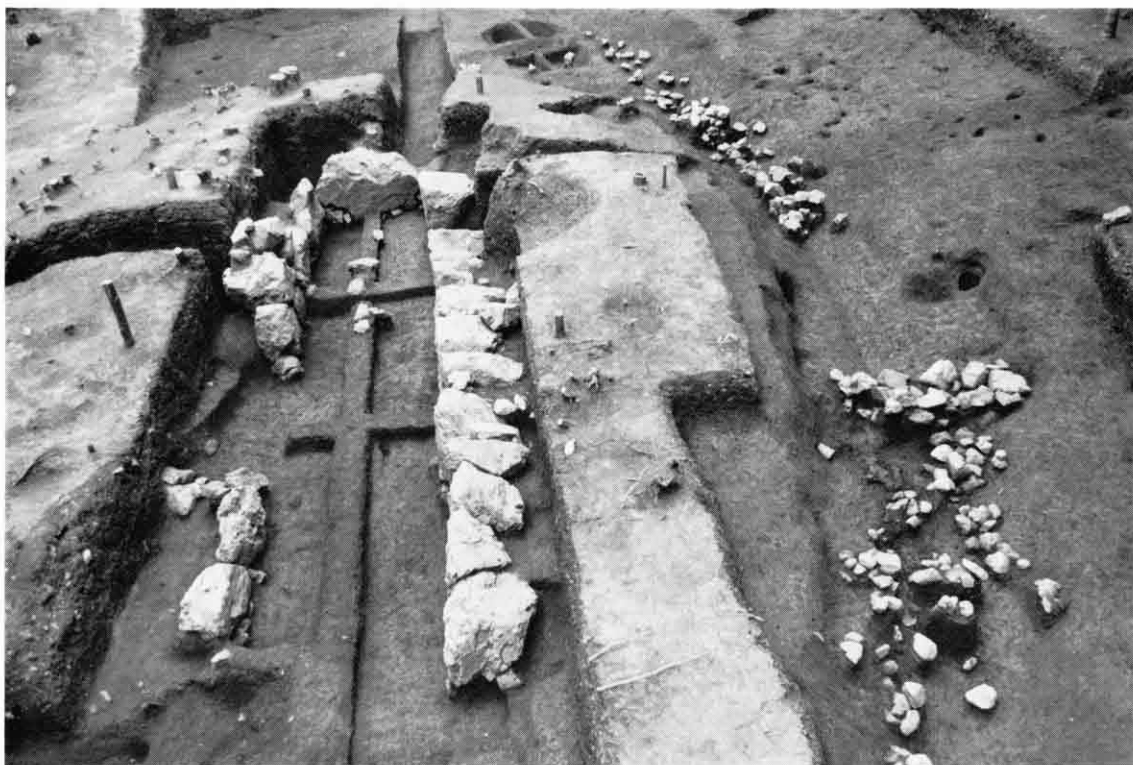


(1) 城ノ尾古墳調査前の全景（南から）

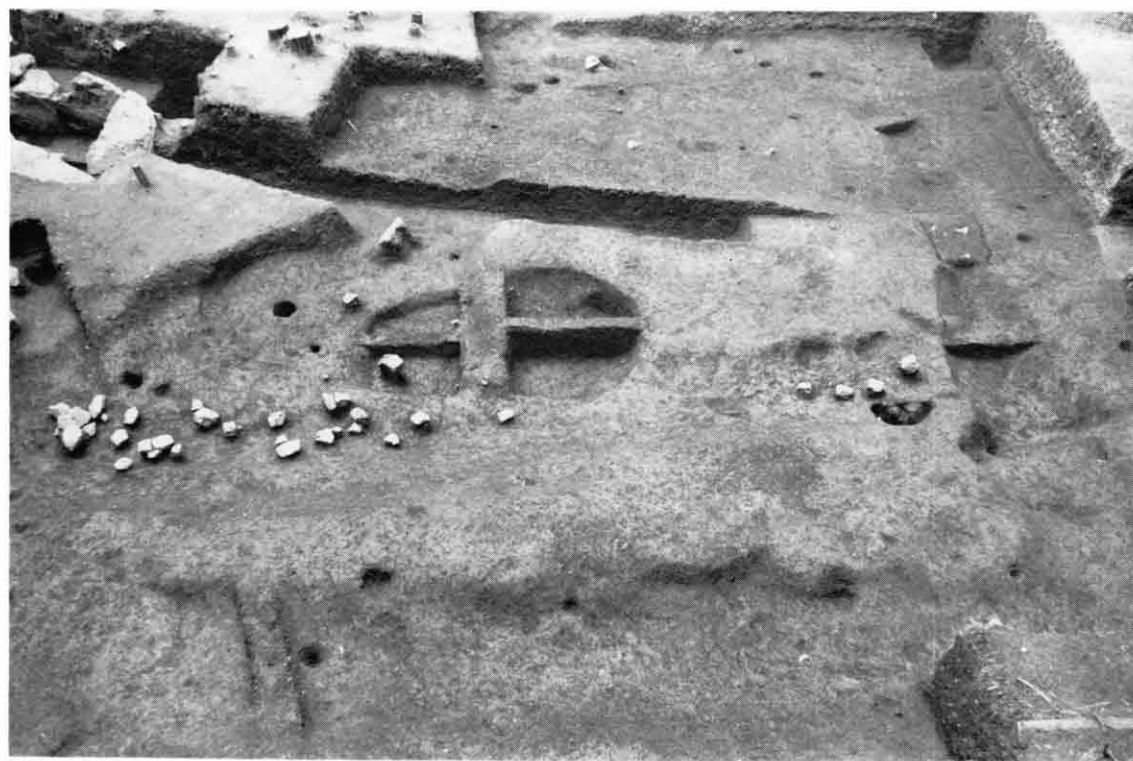


(2) 城ノ尾古墳の遺物出土状況（南から）

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡発掘調査概要

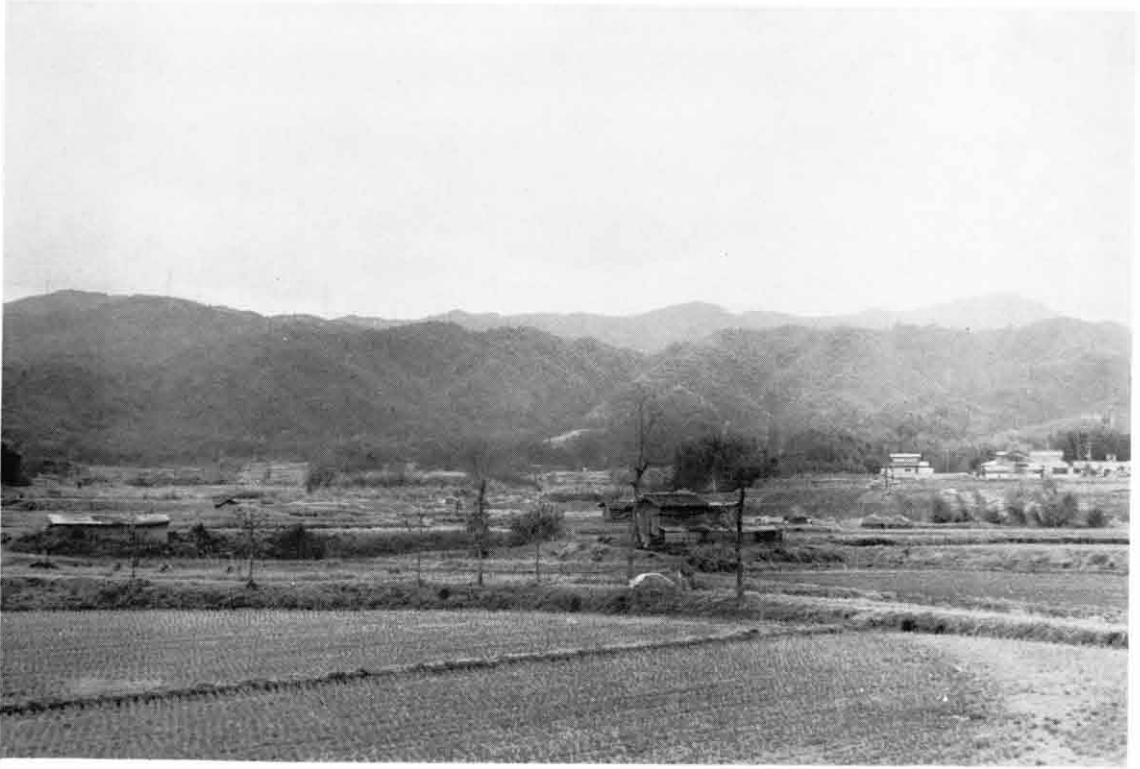


(1) 城ノ尾古墳と中世溝（右側）（南から）



(2) 弥生時代の方形周溝墓（東から）

龜岡市篠窯跡群



(1) 篠窯跡群遠景



(2) 黒岩 1 号窯

亀岡市篠窯跡群



(1) 小柳 1 号窯



(2) 前山 2, 3 号窯

久 世 廃 寺



(1) 講堂東辺 (東北から)



(2) 築地東南隅部 (東から)

恭仁宮跡の発掘調査について



(1) 大極殿跡（西から）



(2) 建物跡 S B 5501（西から）



創刊にあたって

本年4月、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足した。その設立の目的は、府内の埋蔵文化財の調査、保存、活用及び研究を行ない、その保護を図るとともに、先人の遺した文化財を大切にす考え方の普及育成に努め、地域の文化の発展に寄与するということにある。

当センターの直面する事業は府内の各地における埋蔵文化財の発掘調査であり、7月末現在でその発掘現場の数は10所に達している。若い調査員諸君は各現場に配置され、地元の関係者の協力を得て、熱心に発掘調査の作業を進めている。夏は連日の炎天に汗を流し、冬は厳寒の風雪に堪えての作業である。悪天候のため発掘のできない日も多い。決して楽な仕事ではない。青年時代をこの道に賭けるという学問的熱意と、十分な健康の持主でなければ、動まらない職業である。

センターの調査員は定期的に会合し、現場で得た情報や知識を交換する機会をもっている。しかし、調査報告書としてまとめられる前に、受けもちの現場での見聞の速報が欲しいし、参考資料なども活字にしておき、将来に役立てたい。

そういう必要から、当センターの機関誌としてこのニュースが、当分は季刊として、刊行されることになった。この創刊号では、当センターの職員の執筆になる記事のほかに、京都府と城陽市の教育委員会の方からも寄稿していただき、感謝にたえない。センター内の業務連絡のためだけではない。広く京都府内外の関係者や関心を持たれる方々も読んで下さって、当センターの仕事を理解され、進んで暖い助言や援助をいただくことができれば、望外の幸せである。

本誌が号を重ねるごとに成長し、読みごたえのある立派なものに育つことを祈り、一文を草して巻頭の辞とする次第である。

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福山敏男

昭和56年度発掘調査予定の遺跡

堤 圭三郎

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが行う主要な業務の第一は、京都府下に存在する各種遺跡の発掘調査である。当財団法人設立要項の中には「国、公社、公団及び京都府等が行う開発工事に伴う遺跡の発掘調査」を行うことになっている。これらの発掘調査は、昭和55年度までほとんどすべてを京都府教育委員会が直接実施してきたが、今年度から当財団が引き継いで実施することになった。

発掘調査の原因となる開発工事の主体者が国、公社、公団及び京都府であるということは、公共事業に伴う発掘調査だけを実施することに外ならないが、実際の発掘調査は公共事業、民間事業とはっきり区別できないものもあり、遺跡の種別、性格によっては、原因となる事業に区別があっても同時に発掘調査を実施することが好ましい場合もある。したがって、当財団法人が実施する発掘調査の対象も正確に決定しているわけではない。このことについては、京都府教育委員会が各市町村教育委員会と引き続き協議し、区別の判然としないものについては、ケースバイケースで対処することになっている。

さて、当財団法人が既に受託し発掘調査を実施しているもの又は何らかの協議があり、近く発掘調査が予定されるものは、別表のとおり28件ある。1件につき複数の遺跡を対象としているものもあるので、実際に発掘調査の対象となる遺跡数は50か所を越えることになる。これらの中には、既に昭和55年度まで京都府教育委員会が実施し、今年度当財団法人が引き継いで実施するものがある。こうした継続実施のものは、既に委託契約も締結し発掘調査を開始したが新規のものは今なお協議中である。

今後、別表の28件以外にも京都府教育委員会との協議により緊急に発掘調査を必要とすることがあると考えるが、京都府教育委員会、各市町村教育委員会及び各委託者の協力を得てこれらの遺跡の発掘調査を正確に実施したいと考えている。

当財団法人発足後、わずか3カ月が経過しただけであり、その運営もまだ緒についたばかりであり、今後多くの困難な問題が生じることが予想される。一方、発掘調査の業務は新生財団法人と否にかかわらず、確実に委託され、実施を余儀なくされている。昭和56年7月1日現在で、事務局長（常務理事）以下総務課4名、調査課21名、合計26名の職員が、京都府下の各種遺跡の発掘調査を通じ、当財団法人設立趣意書に明記された「京都府の歴史の解明に寄与するとともに、府民文化の向上に寄与する」ために努力したいと念願している。

昭和56年度発掘調査予定の遺跡

番号	名 称	種 別 員 数	所 在 地	原因工事	調査対 象面積	調査予 定時期	備 考
1	橋 爪 遺 跡	集落跡	熊野郡久美浜町橋爪	府立高校校舎改築	m ² 1,450	8～9月	
2	中 尾 遺 跡	古 墳	与謝郡伊根町	府道バイパス工事	200	8～9	
3	下 畑 遺 跡	散布地	与謝郡野田川町字三河内810	府立高校校舎改築	750	10	立会調査
4	狸谷3号墳他	古墳8 城跡1	福知山市字半田小字狸谷他	国鉄福知山電車基地	5,000	5～10	昭和55年から継続
5	セイゴ1号墳他	古墳5	福知山市字笹尾小字セイゴ	同 上	1,300	5～11	昭和55年から継続
6	論田2号墳他	古墳3 寺跡1	福知山市字半田小字論田他	同 上	2,000	5～8	昭和55年から継続
7	後 青 寺 跡	寺 跡	福知山市字大内小字後正寺	近畿自動車道舞鶴線	1,400	8～9	
8	大 内 城 跡	城 跡	福知山市字大内小字平城	同 上	5,200	5～10	昭和55年から継続
9	宮 遺 跡	集落跡	福知山市字宮小字城ノ尾他	同 上	5,400	9～11	昭和54年から継続
10	土師南遺跡	散布地	福知山市字土師小字南町650	府立高校校舎改築	1,500	7～8	
11	青 野 遺 跡	集落跡	綾部市青野町	橋脚建設工事等	4,000	10～12	
12	園 部 城 跡	城 跡	船井郡園部町小桜97	府立高校校舎改築	1,350	7～10	
13	千代川遺跡	集落跡	亀岡市千代川町北ノ庄他	国道9号バイパス建設	2,500	5～11	昭和55年から継続
14	篠 窯 跡 群	窯跡5	亀岡市篠町字西長尾1-24他	同 上	9,100	5～11	試掘調査を含む 昭和52年から継続
15	広 隆 寺 跡	寺 跡	京都市右京区太秦蜂ヶ岡町	警察署改築	1,500	7～11	
16	平 安 宮 跡	宮殿跡	京都市中京区西ノ京式部町1	府立高校校舎改築	180	9～10	
17	伏 見 城 跡	城 跡	京都市伏見区桃山町遠山50	府立学校校舎改築	520	10～11	
18	法 成 寺 跡	寺 跡	京都市上京区中御霊町424	府立医科大学改築	未定	2～3	
19	平 安 京 跡	都城跡	京都市上京区	庁舎建築	200	9～10	
20	長 岡 京 跡	都城跡	長岡京市今里4丁目	道路・住宅建設	500	10～11	
21	長 岡 京 跡	都城跡	長岡京市井ノ内朝日寺	府立学校校舎増築	220	8	
22	長 岡 京 跡	都城跡	長岡京市友岡1丁目1-1	府立高校校舎増築	400	8～9	
23	長 岡 宮 跡	宮殿跡	向日市向日町	府立郷土資料館建設	1,000	未定	
24	一番割古墳他	古墳8 城跡2	宇治市菟道ノ五ヶ庄	宅地造成	3,000	7～10	
25	宮 平 遺 跡	散布地	城陽市寺田小字宮平	宅地造成	4,000	12～3	
26	木 津 遺 跡	散布地	相楽郡木津町	警察職員宿舍建設	500	7	
27	燈 籠 寺 跡	寺 跡	相楽郡木津町木津今城	府立高校校舎改築	750	7～8	
28	前 梶 古 墳	古 墳	相楽郡加茂町大字里小字前梶	道路建設	200	10～11	

昭和56年度発掘調査予定の遺跡一覧表

昭和55年度京都府下埋蔵文化財の調査

堤 圭三郎

京都府下における埋蔵文化財の発掘調査は、年ごとに増加し、調査に携わる技術職員の数もここ数年急に多くなってきた。京都府教育委員会が調べた昭和55年中の発掘調査届出書及び通知書の件数は189件に及んでいる。これら届出書、通知書では、古墳群等も1件として取扱われているのが普通であるから、実際に発掘調査された遺跡数はさらに多くを数えることになる。付図は189件の調査を遺跡の種類別、地域別に分類したものである。この図でもわかるとおり発掘調査が頻繁に行われた地域は、京都市とその南部の乙訓地域であり、しかも両地域の都城跡が中心である。乙訓の長岡京跡、京都市の平安京跡及び鳥羽離宮跡は一年中どこかで発掘調査が行われているといっても過言ではない。

一方、数年まえまでは年間1～2件の発掘調査しか行われていなかった丹後、与謝、中丹という京都府中・北部でも、近年発掘調査件数が増加する傾向を示している。これまで、京都市を含む南部地域を中心とする開発工事が多かったが、最近北部でも道路建設、ほ場整備等の工事により、遺跡に及ぼす影響が出てきたことを示すものである。

京都市域の調査の大部分は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が担当し、また、乙訓地域の調査は長岡京跡発掘調査研究所が関与し、定期的に機関誌「長岡京」にその報告を掲載している。本稿では京都府下各市町教育委員会及び京都府教育委員会が主体となって実施した発掘調査の中から、いくつか選んでその概要を紹介することにする。

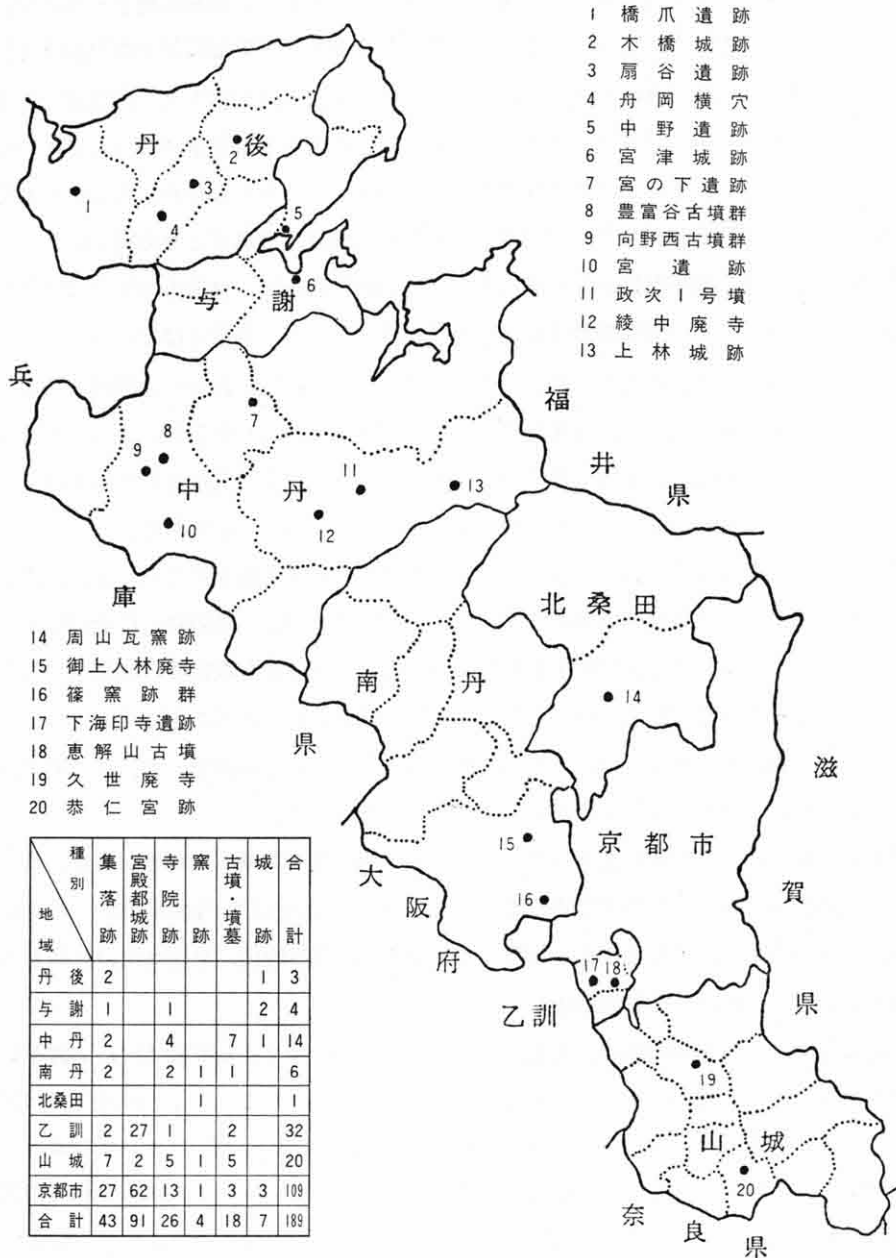
まず、集落跡の発掘調査では、久美浜町橋爪遺跡、峰山町扇谷遺跡、大江町三河宮の下遺跡、福知山市宮遺跡、長岡京市下海印寺遺跡などがあつた。

橋爪遺跡からは、弥生時代後期の住居跡のほか多数の溝状遺構、土壙等が検出された。昭和42年の試掘調査で弥生時代後期の集落跡と推定されていたが、今回の調査で弥生時代中期にさかのぼる遺跡であることが判明し、古墳時代、奈良時代、平安時代の土器も多数出土するなど、長期にわたる集落跡であることがわかつた。

扇谷遺跡は、標高50～60mの丘陵上にあり、その斜面に延々とV字溝又はU字溝をめぐらすもので、溝から陶埴^{けん}が出土したことでよく知られた遺跡である。今回の調査では既に確認されていた溝の延長^(注2)を数カ所で検出し、この結果、溝は丘陵頂部をとり囲むように延延500mに及んでいることがわかつた。丘陵頂部すなわち溝で取り囲まれた中心部の調査はまだ行われていないが、竹野川流域を見降ろすこの丘陵は、丹後地方における弥生時代前・中期の高地性集落として注目される。この丘陵の最頂部には、古墳時代前期の築造と

推定している前方後円墳2基、円墳2基からなる八幡山古墳群があることもつけ加えておきたい。

三河宮の下遺跡は、由良川の河岸段丘に立地する縄文時代後期及び古墳時代の集落跡である。今回の発掘調査は、由良川の支流である三河川の改修工事により削平される部分を



第1図 昭和55年度京都府下埋蔵文化財調査地位図

中心に実施したものであるが、炉跡を伴う縄文時代後期の竪穴住居跡3基と古墳時代の住居跡8基が確認された。住居跡の上部に堆積した包含層から、縄文土器、石器、装身具など多彩な遺物が出土した。対岸下流の桑飼下遺跡から多量の打製石斧が出土したことに対し、ここからは石錘の出土が多かったことは両遺跡の生活基盤の相違があったことを示すものとして興味深い。

長岡京跡の発掘調査では、長岡京造宮前の住居跡や遷都後の集落跡が、多数の遺物とともに各所で検出されている。

古墳の発掘調査では、福知山市豊富谷古墳群、向野西古墳群、綾部市政次1号墳、京都市大枝山古墳群、双ヶ丘古墳、長岡京市恵解山古墳のほか峰山町舟岡横穴があった。

豊富谷古墳群の調査では、最初予定していた17基の古墳が、樹木伐採の結果、さらに増加し円墳5基、方墳22基、前方後方墳1基の計28基になった。4世紀代に築造された一群と5世紀に築造された一群に分けられ、福知山地方における古墳築造の初期の段階の様相が明らかとなった。この調査は昭和56年にも引き続き実施しているので、丘陵全体にわたる古墳築造の過程を解明することができると思う。

向野西古墳群は、6・7・9・14号墳を対象としたものであった。昭和48年に群中最南端の5基が調査され、古墳群の築造年代、内部構造等についてはよく知られていたが、今回調査した6号墳では玄室中央部から奥壁に向って、礎床の上に人頭大の上面平坦な石を敷き並べた棺台を備えていたことは、構造上注目すべき点である。7・14号墳の2基は既に石室の石が抜き取られていたが、6・9号墳からは多量の須恵器、土師器、金環、鉄器等が出土し、古墳時代後期の豊富な資料を追加した。

政次1号墳は、狭隘な谷あい築かれた直径約40mの円墳であり、墳頂部に木棺直葬の土壙墓が2基検出された。第1主体部から鉄剣1口、第2主体部から鉄剣1口、土師器高杯1個が出土したのみで、墳丘・内部主体の規模、構造の立派なことにくらべ、出土品はやや貧弱な感じがするが、山間の狭小な谷あい築かれた5世紀代の古墳の一例を示すものとしては重要な成果であった。

恵解山古墳は、標高16mの地点に築かれた前方後円墳であり、その立地は山城地方に於いて最も低位を占めるものである。前後の長径120m、周濠を含めた全長180mの規模は乙訓地方で最大を誇る。今回の調査のきっかけとなったのは墓地造成工事中に鉄器が発見されたことであった。工事を中止し、急拠発掘調査を実施したが、墳丘の主軸に平行し、くびれ部からやや前方部に偏した位置に、鉄製利器だけを埋納した施設が検出された。出土した鉄器は、直刀146口、剣11口、短刀1口、短剣52口、ヤス状鉄器5本、刀子10本、鉄鏃472本、計692点もの多量に及んだ。これ程多量の鉄器を埋納している古墳は畿内でも数

少ない。しかも、すべて鉄製の利器である。恵解山古墳はその後、国の史跡指定を受けるべく、文化庁の文化財保護審議会から答申があった。長岡京市をあげて保存の努力がなされた結果であるが、この貴重な古墳が史跡として永く後世に残されることになったのは、文化財保護の上からよろこばしいことである。

舟岡横穴は、丘陵斜面に3基露出していたものであり、うち一基から土師器、須恵器、人骨片が原位置のまま出土した。この舟岡横穴の調査は、京都府北部における唯一の調査例として、今後同種の遺跡調査の参考となるものである。

寺院跡の発掘調査では、宮津市中野遺跡、綾部市綾中廃寺、亀岡市御上人林廃寺、城陽市久世廃寺などがあつた。

中野遺跡は、宮津市国分にある史跡丹後国分寺跡に対し、丹後国分尼寺跡と推定されているものであり、昭和54年から発掘調査が行われ今回はその第2次調査であつた。大乘寺境内とその周辺にひろがる畑地を対象としたが、東西に2.4 mの間隔を置いて検出された2個の礎石以外には顕著な遺構は検出されなかつた。しかし、出土遺物の中には平城宮系の軒平瓦、緑釉陶器、青磁、白磁等の破片が多数あり、この地域一帯を丹後国分尼寺跡と推定する根拠の一端を窺うことができる。今後の調査に期待したい。

綾中廃寺は、これまで軒瓦や風鐸の破片の出土したことにより、由良川流域における唯一の奈良時代寺院跡と考えられてきたものであるが、今回はじめて寺院推定地の北部で調査が行われた。その結果、1辺3～4 mの竪穴住居跡3基、2間×4間の掘立柱建物跡一棟が確認されたほか、掘立柱建物の柱穴と考えられる掘方が、南北方向に9間分検出され、その西方6.6 mの位置に2個の柱穴を検出した。西側の2個の柱穴と東側の一連の柱穴はやや趣きを異にしているので、これらを南北に長い建物跡とするか、東側の柱穴を柵列とするかは、にわかに決め難いが、奈良時代の寺院もしくは官衙的性格をもつ遺構として特筆すべきものである。綾中廃寺に関する調査は昭和56年度にも実施されているので、さらに寺院の性格、規模等を知ることのできる調査結果が得られるかもしれない。

御上人林廃寺の調査は、今回第6次を迎えた。これまでに金堂、講堂の石積み基壇の最下段がかるうじて遺存していることがわかっていたが、今回はその他の堂跡、特に中門跡と南門跡を確認することを目的として実施された。その結果、中門跡は全く手がかりが得られず、南門跡の北辺の石積み基壇の一部と思われる石列が確認された。南辺部分は道路敷に当るため調査することはできなかったが、金堂跡、講堂跡と南北一直線上に並ぶ位置関係から考えて、まず南門跡と判断して差しつかえないものと思われる。史跡丹波国分寺跡の西方400 mに位置し、丹波国分尼寺跡と推定しているこの御上人林廃寺の6次にわたる調査からも、尼寺と断定できる資料が得られなかつたこと、遺構の遺存状態が不完全で

あったことは残念である。

久世廃寺の発掘調査は、昭和54年度まで3次にわたって行われ、法起寺式伽藍配置をもつ奈良時代の寺院跡としてその規模・構造が明らかにされていたが、今回の調査は、既に一部確認されていた講堂跡を明らかにすること、中門跡及び回廊跡を確認^(注10)することを目的として実施された。その結果、中門跡とそれにとりつく回廊跡は検出されなかったが、講堂跡は基壇の規模が、東西23.5m、南北13mの瓦積みであることがわかった。また、講堂跡周辺からは、瓦類のほか緑釉、二彩、三彩、灰釉の陶器が多数出土し、講堂の掘立柱抜き取り穴から出土した土師器の皿の時期から推定して、平安時代前期に廃絶したものと考えられた。

窯跡の発掘調査では、京北町周山瓦窯跡、亀岡市篠窯跡群があった。

周山瓦窯跡は、奈良時代の周山廃寺に供給したと考えられる瓦窯跡で、昭和55、56年度の2年間で発掘調査することになった。今回の調査はその第一年次に当り、瓦窯跡の本体を確認するため、丘陵斜面に試掘坑を入れる調査^(注11)であった。昭和56年度に本格的調査が行われるので、その結果に期待が寄せられる。

篠窯跡群の調査は、昭和52年から建設省の国道9号バイパス工事前調査として実施されており、昭和54年からは日本道路公団の依頼により京都府教育委員会が実施している。既に発掘調査を実施した登窯跡は、前山1号窯跡と小柳1号窯跡の2基であり、緑釉陶器施釉のための窯と考えられるいわゆる三角窯は黒岩1号窯跡1基であった。今回調査した黒岩4号窯、前山2・3号窯跡、芦原1号窯跡の4基のうち、前の3基は^(注12)いずれも三角窯であった。規模にわずかの違いはあるが、正三角形の二頂点を楚口とし、傾斜地の上部に当る他の頂点を煙出しとする構造は共通している。壁面は最もよく残っている前山3号窯跡でその高さは約40cmである。この壁の上部にドーム状の天井部が備えられていたものであろう。三角形の一辺は1.5～1.8mというごく小規模のものであり、今後さらにいくつかの三角窯が検出される可能性がある。篠窯跡群の全容がつかめない現状で、窯跡群全体の保存計画を立てることは困難であるが、わが国ではじめて確認されたこの特殊な構造の窯跡に関しては少なくとも現状保存をはかる必要があることを痛感する。

城跡の発掘調査では、弥栄町木橋城跡、宮津市宮津城跡、綾部市上林城跡などがあった。

木橋城跡は、標高40mの丘陵頂部を本丸とする小規模な連郭式中世山城跡である。本丸跡を中心とする周辺一帯の地形測量を行うとともに、削平される予定の本丸跡の頂部にトレンチを入れ建物跡の存在をたしかめたが、最近の耕作で地山直上まで攪乱されており、建物跡を検出することはできなかった。

宮津城跡の調査は、京極高廣の築城になる近世の宮津城を対象としたもので、調査地の

東北部で、東面する石垣を延長約20mにわたって検出した。この石垣は高さ約1.5 m遺存しており、直下に直径約20cmの胴木が置かれていた。この石垣の一部に幅約8 mの土橋があった。「宮津鶴賀城図」によれば、今回発掘した土橋、石垣は、二の丸東側の一面に当るものと考えられる。

上林城跡の調査は、昭和53・54年に続いて行われた。今回の調査は、城跡の最上部すなわち本丸跡を対象としたもので、対象面積は2,000㎡に及んだ^(注13)。本丸跡南端部は約200㎡にわたって約1 m高くなっており、ここからは上林川の上下流を一望することができ、まさに城の天主台たるにふさわしい場所である。実際に、表土直下に数個の礎石と北面する石垣を検出した。本丸中央部やや東寄りに東西8 m、南北12m、深さ約1 mの岩盤を掘り抜いた竪穴状遺構が検出され、この掘り込みの中程と最下底部に、礎石をもった建物跡が検出された。ともに半地下式の建物であるが、底部に焼土があることから、最初の建物は火災に遭ったと考えられる。このほか、中央部やや西寄りに、人頭大の自然石を積んだ東西1 m、南北2 m、深さ1.2mの地下式貯蔵庫と考えられる遺構もあった。丘陵頂部を占める本丸跡の遺構として豊富な資料が得られたが、既に一部削平されており建物の規模等を正確に知ることは困難であった。

最後に宮殿跡、都城跡の発掘調査は、冒頭にも述べたとおり、総調査件数の約半数を占め、平安京、鳥羽離宮、長岡京を対象としたものであったが、ここでは、京都府の最南端部にある加茂町の恭仁宮跡の調査についてのべることにする。

恭仁宮跡の発掘調査は、昭和48年度分の分布調査をはじめとして、毎年実施されているが、昭和55年度も史跡山城国分寺跡の範囲内を中心として行われた。まず、山城国分寺の遺構としては町立恭仁小学校南方の水田で、南大門の西北隅の地覆石抜き取り跡を検出した。この南大門の規模は2間×5間であったと推定された。

恭仁宮の遺構としては、大極殿北西方において19個の柱穴が南北方向に10尺等間で並んでいることがわかった。北端部で西方へ曲ることが予想される柵列である。この柵列と大極殿中軸線で対称の位置を発掘したところ、2間×5間の母屋の四面に廂をもつ掘立柱建物跡とその北方に2間×7間の母屋に南北二面の廂をもつ掘立柱建物跡を確認した。この二棟の建物跡は南北の柱筋が一致し、共に柱間が10尺等間であること、南方建物跡の柱抜き取り穴から出土した瓦、土師器片等から判断し、恭仁宮に係る建物であったことは間違いない。しかも、規模、構造から推定して恭仁宮官衙の格式高い建物で、正殿と後殿の役割を果していたものと考えられる。大極殿以外にはじめて恭仁宮に係る建物跡が検出された意義は非常に大きいといわねばならない。

以上のべてきたように、昭和55年度の京都府下における埋蔵文化財の発掘は、多種多彩

であった。189件の発掘調査のうち、京都府教育委員会が実施したものは20件である。昭和56年度からは、昭和55年度まで京都府教育委員会が実施してきた発掘調査の大部分を当財団法人が引き継いで実施することとなった。当財団法人では、京都府教育委員会及び各市町村教育委員会の協力を得て、これらの発掘調査を正確に実施することに努力したいと願っている。

(堤圭三郎=当センター調査課長)

- 注1 高橋美久二「橋爪遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報 1968』) 京都府教育委員会 1968
- 注2 田中光浩『扇谷遺跡発掘調査報告書』(峰山町文化財調査報告書第2集) 峰山町教育委員会 1975
- 注3 渡辺 誠・片岡 肇ほか『桑飼下遺跡発掘調査報告書』舞鶴市教育委員会 1975
- 注4 近藤義行ほか『向野西古墳群発掘調査報告書』福知山市教育委員会 1974
- 注5 長谷川達「政次1号墳発掘調査概報」(『綾部市文化財発掘調査報告』第8集) 綾部市教育委員会 1981
- 注6 山本輝雄「恵解山古墳の発掘調査」(『日本歴史』389号) 1980.10。山本輝雄「長岡京市恵解山古墳の発掘調査」(『考古学ジャーナル』184) 1980.12。久保哲正「恵解山古墳第3次発掘調査概要」(『長岡京』19号) 長岡京跡発掘調査研究所 1981.2。山本輝雄、久保哲正ほか「恵解山古墳第3次発掘調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第8冊) 長岡京市教育委員会 1981
- 注7 杉原和雄「綾中廃寺」(『綾部市史』上巻) 綾部市 1975
- 注8 中村孝行、小山雅人「綾中廃寺跡第1次・第2次発掘調査概報」(『綾部市文化財発掘調査報告』第8集) 綾部市教育委員会 1981
- 注9 樋口隆久『御上人林廃寺第6次発掘調査報告書』(『亀岡市文化財調査報告書』第11集) 亀岡市教育委員会 1981
- 注10 近藤義行「久世廃寺第3次発掘調査概要」(『城陽市文化財調査報告書』第11集) 城陽市教育委員会 1981
- 注11 山口 博「周山瓦窯跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1981-2) 京都府教育委員会 1981
- 注12 安藤信策・水谷寿克ほか「昭和55年度篠窯跡群発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1981-1) 京都府教育委員会 1981
- 注13 中村孝行「上林城跡第3次発掘調査概報」(『綾部市文化財発掘調査報告』第8集) 綾部市教育委員会 1981
- 注14 中谷雅治・大槻真純「恭仁宮跡昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1981-1) 京都府教育委員会 1981

豊富谷丘陵遺跡の調査

松井忠春

ここに紹介しようとする豊富谷丘陵遺跡は、行政上、京都府福知山市字篠尾～同今安小字鴨谷に所在する。すなわち福知山市西方約 2.5kmの南北に細長い標高40～50mの豊富谷丘陵に点在する古墳や寺院跡等を総称した遺跡である。昭和54年度に実施された京都府教育委員会の遺跡分布調査で81か所を数える古墳や寺院跡が確認された。この度この豊富谷丘陵の西半部(図版1一上)に国鉄福知山電車基地が建設されることになり、その敷地内には33か所の古墳等が存在するが、電車基地建設に伴って姿を消すことになり昭和55年7月21日から2か年に亘って発掘調査を実施し、記録保存することになりました。昭和55年度に実施した調査地は、都合30か所にのぼるが29か所は古墳である。その調査結果は別表のとおりであるが、ここでは調査結果の概要をまとめるとともに若干の古墳の形成等について指摘し、今後の調査・研究の指針にしたいと思う。

1. 発掘調査は、昭和55年7月21日より昭和56年3月31日まで実施した。昭和55年度の調査は、中山道の南側を主たる対象とし(第1図)、一部新庄地区にも着手した。この中山道の南側対象地をⅢ区と呼称し、さらに尾根によってⅢ区北尾根、Ⅲ区南尾根に二分した。作業は調査対象地の樹木伐採から平板測量・写真撮影等を経た後、3班に分れて発掘調査にとりかかった。調査はその内、典型的な古墳とそうでない古墳から着手した。これは今後の調査遂行上の基礎 data をも考えた上でのことである。だが調査が進行するにつれ、典型的な古墳は言うに及ばず、そうでない古墳も確実に主体部や遺物が検出され、寧ろ徹底的且つ緻密な分布調査の必要性が痛感されるに至った。そこで分布調査のみならず伐採をも通しさらに平板測量を含めた調査を行った結果、Ⅲ区でさらに古墳が15カ所に分布していることが判明した。最終的には29か所の古墳を調査することとなった。その後調査を縮小させてⅢ区北尾根から南尾根に向かって進めていった。Ⅲ区北尾根(図版1一下)では多くの古墳から刀・剣・鏃などの鉄製品が出土し、㉔論田5号墳と㉕大道1号墳からは古式土師器、㉖論田12号墳から須恵器が発掘された。遺物の出土をみた各古墳の主体部はいずれも木棺直葬による土壙墓であった。冬期に入ると発掘地点をⅢ区南尾根に変え(図版2一上)、一部新庄地区にも着手した。Ⅲ区南尾根は高所から尾根筋に沿って調査を進めていった。その結果は各所に側溝を設けて古墳を区画すると共に多くの擬凹線文を有した古式土師器が出土し、一部から古式須恵器や弥生系の鉄剣や鉄鏃までもが検出された。そ

の一方新庄地区では、顕著な遺物の出土はなかったにも拘らず、前方後方形を意識した古墳を確認し得た。しかしこの間毎日のように雪が降り積雪して作業は思うにまかせなかったこともしばしばであった。

2. 昭和55年度で調査を実施した古墳は29か所を数える。これらの古墳は、狭小な尾根や尾根頂部を利用して構築されており、その多くには尾根と古墳とを区画する丘尾切断溝が設けられている。従って各古墳の墳形は方形ないし長方形を呈する。その規模は平均一辺10m前後であるが、20mを測るやや大形も少なからず存在する。また墳丘高も元来低いものと推定され、通常「方形台状墓」と呼称される墓制の範疇に属するものであろう。

内部主体は長方形に掘り込まれた墓壇内に木棺を直葬した土壙墓であるが、㊦論田12号墳では木棺西側長辺に粘土を貼り付けていた。これらの墓壇の多くは二段墓壇である(図版2一下)が、墓壇断面から数種に分類出来るようである。

また単なる素掘りの墓壇も数件確認されている。木棺そのものの形状についてはその大半は不明であるが組合せ式木棺や割竹形木棺が一部で使用されていたらしい。これらの主体部から遺物の出土をみたが、その出土状況から判断すれば、被葬者の頭位は東方向を中心に南・北側45度の範囲内に納まる。所謂東枕と言え。それは各古墳の立地上からして尾根筋に直交する形となる。特に密集度の高いⅢ区南尾根の場合は、尾根幅が極めて狭小なために、墳丘そのものも尾根筋に沿って長方形を呈することと相俟って、自ずと尾根直交形態を採用せざるを得なかったのであろうか。とは言っても本格的に東枕を意識していたことは尾根頂部に位置する古墳からも否定できないであろう。ただ大道23号墳のみ主体部が南北方向となり尾根筋方向と並行する。これは明らかに築造スペースの問題以外の何ものでもなからう。しかし厳密に方向を測定する限りはやや北より東方に偏行していることは否めない事実である。この他に壺棺という特殊な形態もあるが、壺棺自身、棺としての構造と把える考え方にも疑問があり、むしろ土壙墓と一対をなす特殊埋葬付属施設の1つとして考えるべきかもしれない。これら種々の主体部は一墳丘に一基とすることを原則とするが、古式土師器を伴出する古墳では往々にして複数主体で、剣等の鉄製品を共伴する古墳は一墳丘一主体が多くなるという傾向がある。

3. 29か所にも達する古墳からは当然の如く様々な遺物を出土したのではあるが、それらを大別すると、古式土師器や須恵器の土器類、刀や剣等の鉄製品類と装飾品となる。

古式土師器には、壺・甕・高杯・器台・小型壺等がある。口縁部外面には擬凹線文が施され器壁はヘラミガキされる場合が多い。内面にはヘラミガキやヘラケズリあるいは刷毛



第1図 豊富谷丘陵遺跡分布図

番号	名 称	墳 丘		内 部 主 体		外 部 施 設	
		墳 形	規 模	主 体 部	出 土 遺 物	遺 構	遺 物
22	セイゴ 11号墳	方?	一辺 12m	不 明	—	—	土 師 器
39 ・ 40	向山7号墳 狸谷1号墳	前方後方	全長 35m 一辺約 40m	木棺直葬	—	—	須 恵 器
41	狸谷2号墳	方	長辺 20m 短辺 10m	木棺直葬	土 師 器 (高 杯)	溝	—
62	論田3号墳	方	一辺 11m	木棺直葬	鉄 剣・刀 子・鉄 鏃	溝	—
63	論田4号墳	方	一辺 6 m	木棺直葬	—	溝	—
64	論田5号墳	方	一辺 13m	組合式木棺	壺	溝	器台, 高 杯・壺・甕
65	論田6号墳	方	一辺 12m	木棺直葬	鉄 製 鋤 先		須 恵 器
66	論田7号墳	方	一辺 9 m	木棺直葬	鉄 剣, 鉄 鏃	—	—
68	大道1号墳	方	一辺 8 m	木棺直葬	—	溝	壺
71	大道4号墳	方	長辺 11m 短辺 9 m	木棺直葬	鉄製鉞, 鉄剣, 鏃, 高杯, 壺	溝	—
72	大道5号墳	方	長辺 11m 短辺 9 m	木棺直葬	壺, 杯身, 杯蓋, 鉄鏃, 鉄 剣 (須恵器)	溝	—
73	大道6号墳	方	長辺 14m 短辺 8 m	木棺直葬	壺, 鉄 鏃	溝	器 台
74	大道7号墳	方	長辺 13m 短辺 8 m	木棺直葬	壺	溝	高 杯
84	論田11号墳	方	一辺 20m	木棺直葬	鉄剣, 櫛, 針状鉄器, 刀子	—	—
85	論田12号墳	方	一辺 8 m	木棺直葬	杯身, 杯蓋, (須恵器), 鉄製品	溝	鏃 (須恵器)
86	大道12号墳	自然堆積					
87	大道13号墳	円	径 8 m	木棺直葬	刀 子	溝	器 台 (須恵器)
88	大道14号墳	円?	径 13m	木棺直葬	—	—	—
89	大道15号墳	自然堆積					
90	大道16号墳	自然堆積					
91	大道17号墳	方	長辺 12m 短辺 7.5m	不 明	瓦質陶器(甕), 室町時 代	溝	—
92	大道18号墳	方	長辺 10m 短辺 6 m	木棺直葬	杯 蓋 (須恵器)	溝	—
93	大道19号墳	方	長辺 11m 短辺 8 m	不 明	—	—	—
94	大道20号墳	方	一辺 7 m	木棺直葬	壺		壺
95	大道21号墳	方	一辺 8 m	木棺直葬	土 師 器		高 杯
96	大道22号墳	方	一辺 7 m × 5 m 一辺 5 m × 5 m	木棺直葬	高杯, 甕(須恵器), 鉄剣		—
97	大道23号墳	方	長辺 7 m 短辺 6 m	木棺直葬	高杯, 鉄鏃, 刀子, 鉄剣, 甕(須恵器)		
98	論田13号墳	方	一辺 14m	木棺直葬	刀, 鏃, 斧, 鉞	溝	土 師 器

調 査 古 墳 一 覧 表

目が施されている。高杯の脚部には円孔を外側から穿ったり、壺や甕の底部に製作完成後に穿孔したものもみられる。器台には円形穿孔は殆んど見受けない。これらは古式土師器の形態や製作手法から、在地系、山陰系・北陸系の少なくとも3類型に分類することが可能なようであり、今後整理が進行するにつれさらに細分されるであろう。いずれにせよ、丹波・丹後地方は、山陰地方と北陸地方との中間に位置し、文化的に融合する地域だけに今後の古式土師器研究に資すること大であると評価される。

須恵器には杯身、杯蓋・甕・器台・甕等がある。杯身・杯蓋は対をなして出土している。甕には大・小の2タイプがあり、古式である。器台には流線文とともに三角形透かし孔が認められる。これらの須恵器は形態や胎土・焼成を観察する限りは在地系と言うよりも畿内に近い。

鉄製品類には、刀・剣・鏃・斧・鋤・刀子・鉈・ピン状品とがある。そのうち、刀と鏃、剣と鏃が対をなして出土する場合は3例あり、その場合の鏃は普通14~15本を1束とすることが多い。刀は刀身が長く、最大長90cmにも達する例もある。剣は細身が主であるが、幅広い弥生系の剣も発掘されている。鏃は柳葉形に属するが、逆刺が茎中央一辺に有する特殊例もある。斧は鍛造によるものであり、鋤はU字形を呈する。刀子は刀身背の厚いものと薄手とがある。鉈は縦長形と側面ナイフ形とがある。

これら土器類や鉄製品類以外に装飾品としての竹製櫛がある。櫛は竹ひごを縦形に束ねた縦櫛で、表面には黒漆を塗布している。大小の2種類がある。

出土遺物の概略は上記のとおりであるが、その出土状況を観るに、古式土師器は、内部主体より検出されることよりも丘尾切断溝や墳丘上から出土するケースが圧倒的である。これは埋納形態自身が、被葬者中心主義より墓前祭などの特殊祭祀に重点が置かれていたものと推定される。その一方、鉄製品類の場合はすべて内部主体内から出土しており、古式土師器段階の古墳とは様相を正反対にしており、被葬者中心の埋葬形態となっており、須恵器段階でも同様である。

4. 次にこれら古墳の築造年代について一言触れておきたい。

本遺跡の古墳群は、前述したように、古式土師器段階と鉄製品段階及び須恵器段階の3段階に大別される。古式土師器は須恵器出現前の土師器の総称であり弥生時代最終末から5世紀中頃までの土師器とされているから、自然に、古式土師器段階→須恵器段階の序列が可能となる。鉄製品段階では、鉄製品を埋納する古墳からは全く土器類が随伴しないために、遺物上からの比較は難しい。しかし古式須恵器が内部主体から出土しないまでも墳丘上から検出されることがあり、古式土師器段階での祭祀形態が継続しているものと推量

される。しかも立地上、尾根頂部などの適所を占地する場合が多く、その反面須恵器段階の古墳は古式土師器段階の古墳上に築造したり、尾根斜面に付け加えられたかのような地点に築造されている。以上から鉄製品段階の古墳は須恵器段階のものより先行すると言える。すなわち、古式土師器段階→鉄製品段階→須恵器段階の編年序列となる。では絶対年代となると、古式土師器で最も古式に属するものの中に北陸地方の月影期のものが認められる。この月影期は畿内庄内式併行と考えられており、上限をこの時期に求めても大過なからう。その一方須恵器は、大阪陶器編年を援用すれば、第1型式前半及び同後半にあたり、5世紀後半から6世紀前半に比定される。これらの編年観が正しいとすれば、本遺跡の古墳群は約200年間に亘って漸次築造されていったものと推定される。

5. 以上、昭和55年度の調査結果の概要の一端を略述してきた。発掘調査それ自体は今日継続中であるため、総合的な見解や歴史的・考古学的考察は資料の増加をまって検討していきたいと考える。敢えて昨年度の調査結果からすれば、遺物上からの3段階は如何なる歴史的契機をもって出現したか、特に鉄製品段階と須恵器段階の出現はこの豊富谷地域に大きな歴史的変換が生じたものと推定される。

それは畿内地域との文化的接触のみならず政治的接触が大きなウエイトを占めているものと判断されよう。今後この問題をも含めて古墳個々の年代をも考究しつつ本丘陵遺跡の有する歴史的背景を究明していきたいと考える。

(松井忠春=当センター調査課調査員)

近畿自動車道舞鶴線関係遺跡発掘調査概要

辻本和美

1 はじめに

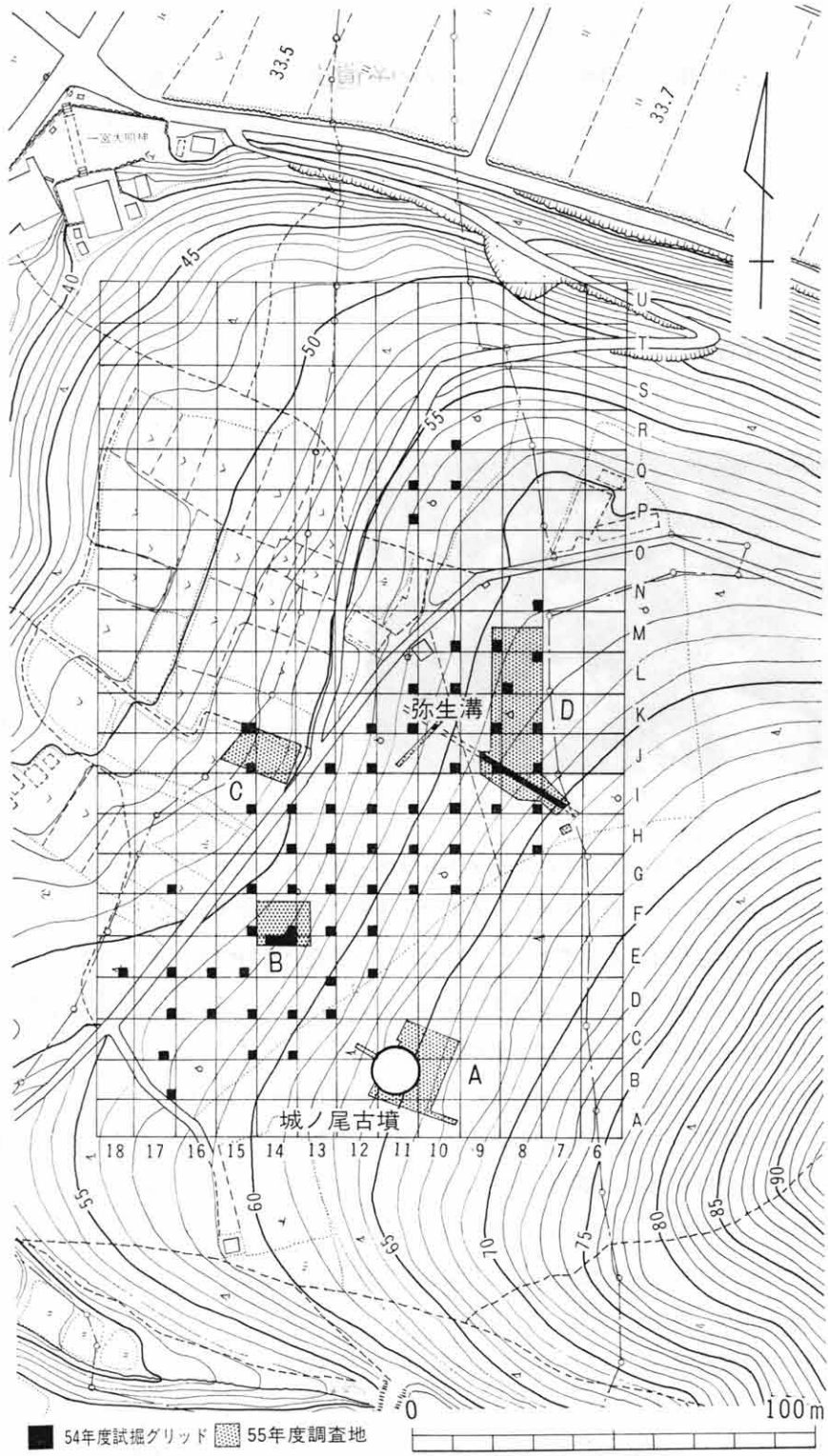
京都府の北部を北流し、日本海にそそぐ由良川は、途中、大小の盆地を貫く。福知山盆地は、そのうちで最も面積が広く、丹波の豊かな自然に恵まれ、古くから人々の生活の舞台となってきた。盆地の西半分を占める福知山市には、市内のいたる所に古墳や各時代の遺跡が分布している。市の中心部から東南約7kmの宮・大内周辺は、由良川の一支流である土師川と、兵庫県の山間部に源を発する竹田川の合流点にあたり、それらの河川により形成された谷平野が樹枝状に広がっている。古くは、六人部郷と呼ばれ、由良川の本流域とは区別される、一つの地理的単元を構成する。

また、山陰道の重要な支線である京街道（国道9号線）や、兵庫県側へ抜ける道が通じ、交通の要地でもある。

この地域に、近畿自動車道舞鶴線の建設が計画され、同路線予定地内の遺跡分布調査を行ったところ、集落跡・古墳・城跡など、計9か所の遺跡が所在することがわかった。



第1図 調査地位置図



■ 54年度試掘グリッド □ 55年度調査地

第2図 宮遺跡、城ノ尾古墳調査地位置図

このため、日本道路公団と協議を重ねた結果、事前に発掘調査を行うことになった。

昭和54年度は、9か所の遺跡のうち、城ノ尾古墳の発掘調査と、宮遺跡の試掘調査を実施した。55年度は、前年に引き続き宮遺跡の調査と、大内城跡の樹木伐採・測量等の予備調査を実施した。

ここでは、城ノ尾古墳と宮遺跡について、その概要を述べるとともに、調査成果の一端を紹介したい。

2 城ノ尾古墳

(位置と外形) 城ノ尾古墳は、大字宮小字城ノ尾の、南から北へ派生する丘陵上にあり、



第3図 城ノ尾古墳の調査風景

標高60mの地点に位置する。前方には谷平野が広がる、景勝の地を占める。

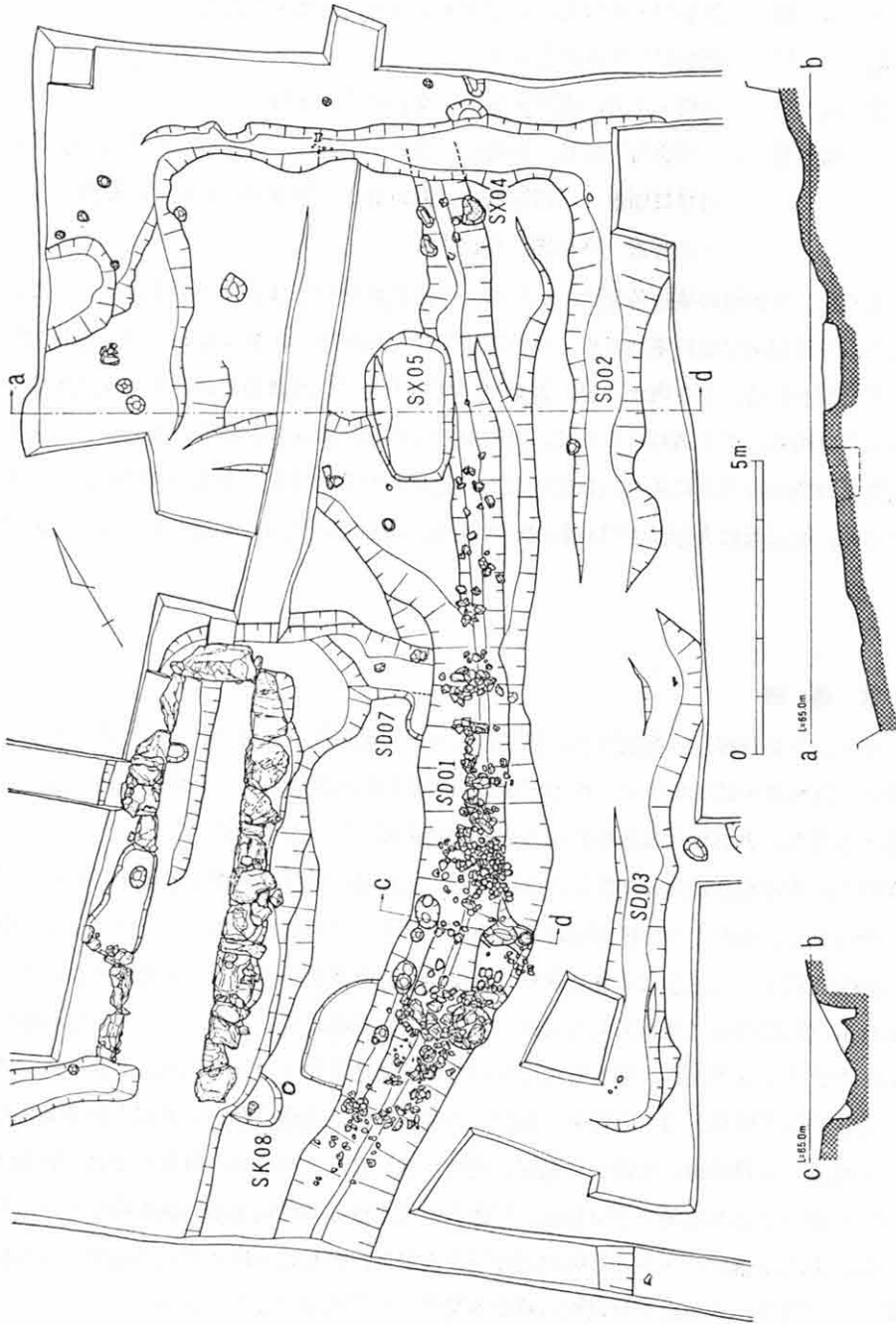
調査以前に墳丘は、ほとんど削られ、頂部に、石室に用いられたと思われる大石が2個残存していた。外形測量では、南北約12m、東西約10.2m、現高約1mを測る、ややいびつな円形を呈していた。

(内部構造) 墳頂部を中心に十字にトレンチを入れ、掘り下げたところ、表土下約80cmで横穴式石室の石組が検出された。石室は、上部の石材が抜き取られ、かろうじて最下段のみを残す部分がほとんどであった。特に、残りの良い部分でも、下から2～3段程度であった。石室の長さ7.35m、幅は奥で1.2m、入口で1.42mを測る。玄室、羨道の区別のない、いわゆる無袖式石室で、南東に開口部をもつ。

石材は、付近に産する、比較的大型のチャート質の自然石を用いている。

墳丘の断面観察によれば、石室の構築は、まず、丘陵斜面に石室より一回り大きい墓壇を穿ち、壁面の積み上げと同時に、墳丘封土を何層にも盛っていったことがわかる。

(遺物の出土状況) 石室内は、攪乱がはげしく、特に、入口付近は、石抜きの際、土砂といっしょに掻き出されたりしく、多数の土器片が散乱していた。一方、石室奥寄りでは、耳飾類の他、鉄器や完形の須恵器類が、まとまって出土しており、この付近は、比較的埋葬時の位置を留めている。石室中央部の西側付近には、上面を揃えた石材が十数個固まっており、敷石か棺台状の施設になる可能性がある。石室内は、後世に再び使用されたようで、石室埋土上層から、糸切り底をもつ、平安時代末頃の土師器・黒色土器の椀・皿



第4図 宮遺跡 A 地点および城ノ尾古墳調査図

等が多数出土した。これらは、埋葬か祭祀にかかわるものとおもわれる。

(出土遺物) 出土遺物としては、次のものがある。

武器類	鉄小刀・4以上, 鉄刀子・4以上, 鉄鎌・2以上
農工具	鉄製U字形鉄鋤先・1
装身具	金環・1対, 銀環・2対, 基石状小石・11
土器類	〔須恵器〕杯11, 杯蓋1, 高杯1, 甕3, 埴5 (ミニチュア壺1) 台付長頸壺1, 細頸瓶1, 直口壺1, 提瓶3, 平瓶2, 甕破片 〔土師器〕高杯脚, 杯破片

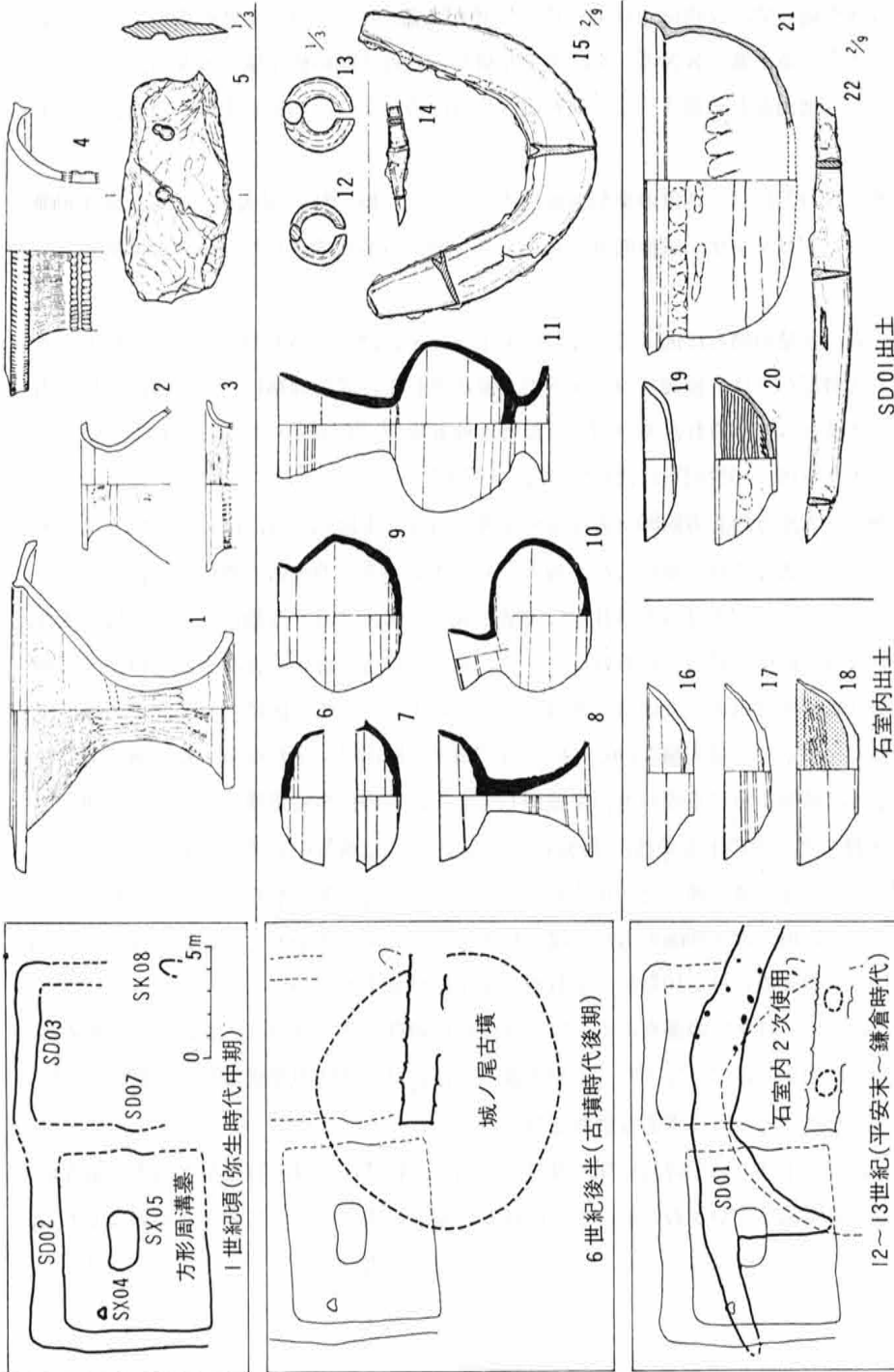
(まとめ) 当古墳の築造時期については、須恵器杯類に3種の型式差が認められるところから、6世紀後半頃に築造され、それ以後7世紀初頭まで、数次にわたって追葬が行われたことがわかる。石室内からは、釘類は一切出土せず、埋葬の際は、組合せ式木棺を用いたようである。出土遺物のうちで、基石状の小石は、鎮魂のためや、護符として埋葬者の衣服又は袋の中などに入れられていたものと思われる。また、大型の鉄製鋤先をもつものに対し、武器類に大型品が見られないことも、被葬者の性格の一端をなすものであろう。

3 宮 遺 跡

(位置と調査の経緯) 宮遺跡は、前述の城ノ尾古墳の同一丘陵上にあり、その先端部の標高50~70m付近に位置する。現水田面からの比高は約30mあり、丘陵の縁辺は崖状の急斜面となるが、遺跡付近は比較的ゆるやかな段丘面を形成している。

54年度に、範囲確認の為の試掘調査を行った。調査は、まず遺跡推定地域を10m四方の方眼に地区割し、それぞれの区画毎に2m四方のグリッドを開けていった。その結果、果樹や畑の開墾によって、かなり攪乱されていたが、弥生時代から中世に至る遺物が出土し、東西150m、南北200mに及ぶ広大な遺跡であることが判明した。また、城ノ尾古墳の墳丘周辺に入れたトレンチから、弥生時代中期の方形周溝墓2基と中世溝が確認された。(A地点と呼ぶ。)55年度は、以上の結果を基に、A地点の他、遺構の存在が予想されるB・C・Dの各地点(約1100㎡)の面的な発掘調査を実施した。このうち、B地点では、弥生時代のV字形溝と瓦器を埋納する中世墓、C地点から中世の井戸状遺構と溝を検出した。D地点では、弥生集落跡にかかる、竪穴式住居や溝の他、多数の土壇や柱穴状のピットを検出した。ここでは、A地点とD地点の検出遺構について簡単にふれておきたい。

(検出遺構) A地点の方形周溝墓は、東西8m、南北9mの規模をもつもので、幅約1mの溝によって区画される。検出状況からみて、溝の一辺を共有し、南北に2基並ぶも



第5図 宮遺跡 A 地点の變遷と出土遺物
 弥生土器：1~4，石包丁：5，須惠器：6~11，金環：12，銀環：13，鉄刀子：14，U字形動先：15，土師器：16・17・19，
 黑色土器：18，瓦器：20・21，鉄小刀：22 (土器は縮尺1/6)

のと思われるが、古墳などの後世の削平がはげしく不明確である。西側部分については、最初から溝を掘らず、段状に削り出していた可能性もある。北側周溝墓の中央から、埋葬主体部と思われる土壇（SX05）を、その北東から性格不明の焼土壇（SX04）を検出した。いずれも地山面から掘り込む。遺物としては、溝内から、高杯と未製品の石包丁が出土した。

中世溝（SD01）は、古墳の東側裾部をめぐるように掘られ、最大幅2.2m、深さ50cmで、断面はV字型を呈す。試掘部分を含め、延長約27m分を確認したが、さらに南側へ続く。

溝内から、多量の礫石に混って、瓦器碗・土師皿・鉄釘や鉄小刀が出土した。埋土を取り除いた溝斜面からは、橋脚状のピット群が検出された。溝の性格については、最初、山城等の防御溝として掘られたものが、その後、埋葬場所に利用されたものと考えている。時期は、鎌倉時代（13世紀）に比定できる。（第5図）

D地点は、A地点の北方約80mの丘陵先端部に当る。本地点では、南北2か所（I8・I9区）で竪穴式住居跡を検出した。両方とも、径7～8m前後の円形住居であるが、斜面の下側は削られ、南半分のみ半月形に周壁が残る。床面では、多数のピットが検出され、同一場所で数回の建て替えが行われたらしい。L8区の住居跡からは、土器片の他、石鏃や石器削り屑が多数出土している。溝は、調査地のI7区～I9区にかけて、等高線に直交する形で検出した。最大幅2.2m、深さ約1.3mで、断面は一字形を呈する。斜面上方の南端部では、礫層からなる硬い地山を掘削しており、その仕事に驚嘆させられる。埋土から、壺・甕など多量の土器の他、磨製石斧、石包丁、石鏃等の石器類が若干出土した。I8区の住居跡は、溝が埋った後作られたことが、切り合い関係から判明した。L8区からは、2m×12m、深さ30cmの方形土壇を検出した。カマド状の焼土面を掘り込んでおり、内部には、人頭大の石材が10数個と多数の弥生土器が含まれていた。

（まとめ） これまでの調査によって、弥生時代の住居跡や溝が確認され、当遺跡の様子がしだいに明らかになってきた。方形周溝墓の存在は、当時の葬送儀礼や、墓地と居住地のあり方をさぐるうえに重要な資料となろう。

出土土器の大半は、弥生時代中期（Ⅲ様式）頃のもので、土器の特徴から兵庫県南部の播磨地方との交流がうかがわれる。中世の時期の集落の様相についても今後の課題である。

（辻本和美＝当センター調査課調査員）

亀岡市篠窯跡群

水谷 寿克

1. 亀岡市篠町は、亀岡盆地の東南部にあたり、京都市西京区老ノ坂峠を境にして隣接している。

篠町の歴史は、弥生時代の石包丁が採集された浄法寺遺跡をはじめとして、画文帯神獸鏡が出土し亀岡盆地最古の古墳と考えられる円墳の王子三ツ塚古墳が知られる。次いで前方後円墳の野条古墳、方墳の滝ノ花塚古墳、樹塚古墳などの中期古墳が現われ、豪族が君臨した足跡を残している。古墳時代後期になると、亀岡盆地東北部の丘陵帯には百基を数える群集墳が形成されたのに対し、篠町の丘陵部帯には群集墳はほとんど確認されず、須恵器を主体とする一大窯跡群が出現する。

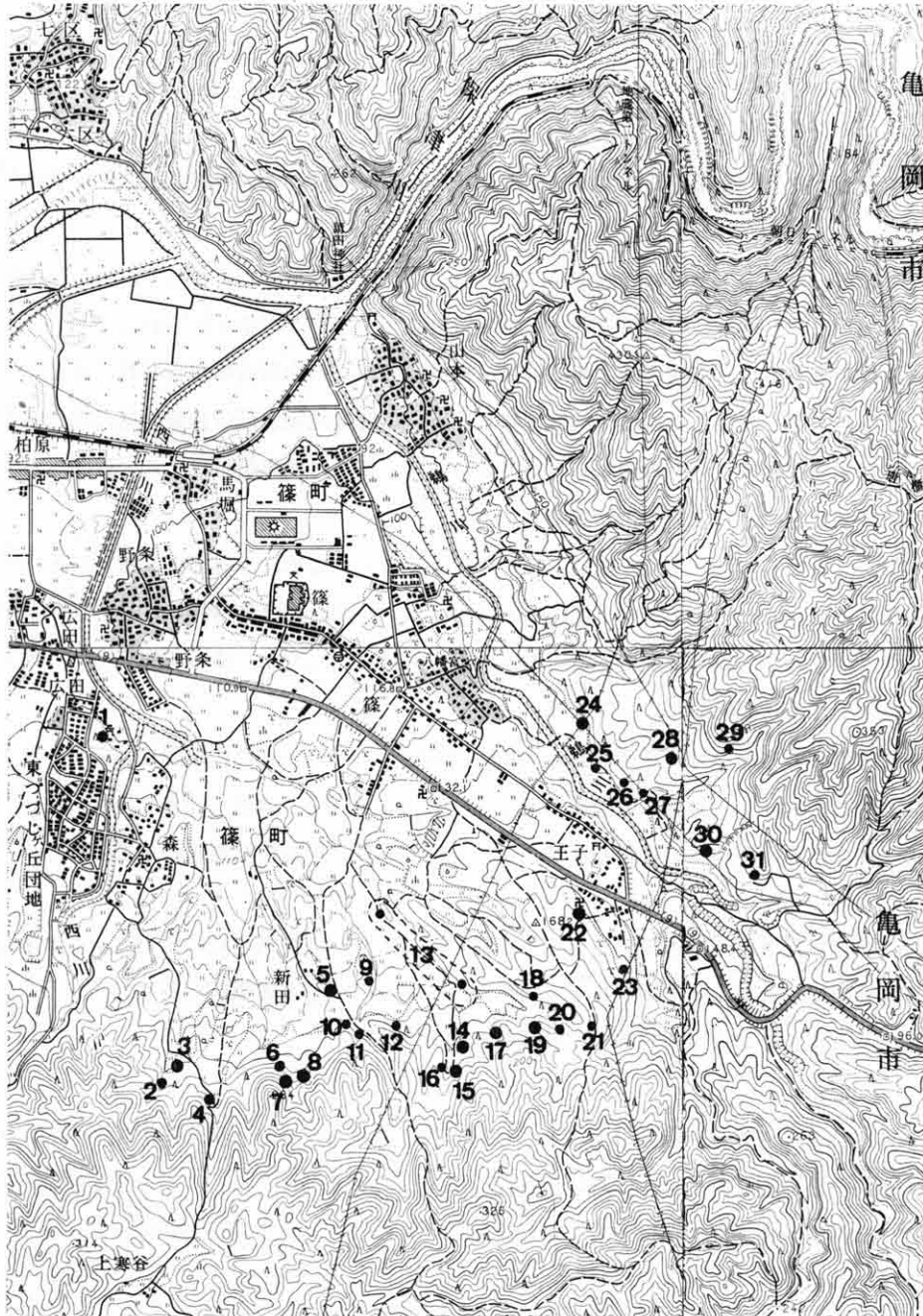
さて、篠町の丘陵部帯は、旧期洪積層の侵蝕が著しいため、小谷が多く複雑な地形を形成している。またその地質は、泥・砂・礫の互層から成り、窯体構築には適した地勢であった。すなわち、篠町の丘陵部は、窯業生産に必要な陶土や水、さらに燃料となる赤松等の樹木を豊富に提供したからである。

篠窯跡群の分布範囲は、東西2.4km、南北2kmに及び、現在までに確認されている窯跡は40基をこえる^(註1)。また民間研究団体である「篠古窯跡研究会」の分布調査や篠町に住む古老の伝聞によると、全体では百基を数える京都府下有数の大規模な窯跡群であることが判明してきている。

篠窯跡群は、篠町の南方部丘陵と北東部丘陵では若干その性格を異にする。すなわち南方部丘陵では、古墳時代後期から平安時代後期に亘る須恵器窯跡が多く分布するのに対し、北東部丘陵の王子や三軒家には瓦窯跡^(註2)が点在する。

2. 篠窯跡群の調査は、昭和51年度より京都府教育委員会が建設省京都国道工事事務所・日本道路公団の委託を受け、篠町の南方丘陵部を横断する国道9号バイパス予定路線内における窯跡の分布状況を把握することを主たる目的として、分布調査・試掘調査・発掘調査を実施し、昭和56年度より京都府埋蔵文化財調査研究センターが引き継いで実施している。

昨年度までに実施した調査は、前山1～3号窯、黒岩1号窯、小柳1～4号窯、芦原1号窯、鍋倉第4窯跡群1号窯、及び西長尾C、F地区作業場の発掘調査と、篠町大字柏原小字禿尾山から大字王子小字西山に至る約2kmに亘る試掘調査である。



第1図 篠窯跡群位置図

号	名称	所在地 <small>郷町, 大字, 小字</small>	時代	遺跡の概要	出土品	備考
1	村山神社窯跡群	森	古墳時代	丘陵腹, 村山神社裏	須恵器片	
2	西前山窯跡	森, 前山	平安時代			
3	前山窯跡群	森, 前山	〃	丘陵腹, 須恵器窯	須恵器片, 窯滓	「埋蔵文化財発掘調査概報」京都府教育委員会以下「府概報」という
4	東前山窯跡	森, 前山				
5	青柳1・2号窯跡	新田, 青柳		丘陵腹, 須恵器窯	須恵器片	
6	黒岩1号窯	篠, 黒岩	平安時代	緑釉窯, 三角窯	緑釉陶器	「府概報」1978
7	黒岩窯跡群	篠, 黒岩	平安時代	丘陵腹, 黒岩北斜面一帯, 須恵器窯, 緑釉窯	須恵器, 窯滓, 緑釉陶器	
8	小柳窯跡群	篠, 小柳	平安時代	丘陵腹, 窯体露出, 須恵器, 三角窯	須恵器, 窯滓	「府概報」1980
9	黒山1号窯跡	篠, 黒山	〃	山腹, 須恵器窯	須恵器片	
10	掛ヶ谷窯跡群	篠, 掛ヶ谷		山腹, 須恵器窯	須恵器片	
11	マル山窯跡群	篠, マル山	奈良時代	丘陵頂・腹, 須恵器	須恵器片, 窯滓	
12	芦原窯跡群	篠, 芦原	〃	須恵器窯		「府概報」1981
13	牙ヶ谷窯跡群	篠, 牙ヶ谷	平安時代	丘陵腹, 須恵器窯	須恵器片	
14	鍋倉第1窯跡群	篠, 鍋倉		山腹, 須恵器窯	須恵器片, 窯壁片	
15	鍋倉第2窯跡群	篠, 鍋倉		舌状台地, 水田, 須恵器窯	須恵器片	
16	西長尾窯跡	篠, 西長尾	奈良・平安時代	丘陵腹, 須恵器窯	須恵器片	
17	鍋倉第4窯跡群	篠, 鍋倉	奈良時代	丘陵腹, 須恵器窯	須恵器片	「府概報」1981
18	牙ヶ谷奥窯跡	篠, 牙ヶ谷	奈良時代	丘陵腹, 須恵器窯	須恵器片	
19	西長尾窯跡群	王子, 西長尾	〃			
20	西長尾奥第1窯跡群	王子, 西長尾	〃			
21	西長尾奥第2窯跡群	王子, 西長尾	〃			
22	意泉寺裏1・2・3号窯跡	王子, 堂ヶ丘	〃	丘陵腹, 意泉寺東側丘陵, 須恵器窯	須恵器(甕・杯) 須恵器片	
23	アナウシ谷窯跡	王子, アナウシ谷		山腹, 須恵器窯	須恵器片, 窯滓	
24	大谷1・2・3・4号窯	篠, 大谷		山腹, 瓦窯, 須恵器窯	須恵器片, 瓦片	
25	ボタモチ山窯跡群	篠, ボタモチ山		山腹, 須恵器窯	須恵器片	
26	狐ヶ谷窯跡群	篠, 狐ヶ谷		山腹, 須恵器窯	須恵器片	
27	ハチカメ谷窯跡群	篠, ハチカメ谷		山腹, 須恵器窯	須恵器片	
28	ハチカメ1・2号窯跡	篠, ハチカメ谷		山腹, 瓦窯, 須恵器窯	軒平瓦, 布目瓦, 須恵器片	
29	灰ヶ谷窯跡	篠, 灰ヶ谷		山腹, 須恵器窯	須恵器片	
30	三軒家1・2・3号窯跡	王子, 三軒家		山腹, 瓦窯	瓦片	
31	A号窯跡	王子, 三軒家	平安時代	山腹, 瓦窯, 平安時代	須恵器, 軒丸瓦, 軒平瓦, 布目瓦	

篠窯跡群遺跡一覧表

須恵器窯は、須恵器が還元焰焼成された陶質の土器であるため、1100度という高温を必要とし、その形態は登窯が主となる。調査を実施した前山1号窯、小柳1号窯、芦原1号窯は、奈良時代末から平安時代初期にかけてのほぼ同時期の窯で、その窯体は半地下式の登窯であることが判明した。

窯体の規模は、主軸長7～9m、最大幅1.2m前後、最大傾斜角30～46度である。窯体の構築には、丘陵斜面にU字状の溝を掘り込み、壁面を整えてから天井部を構築している。壁面は地山を掘り込んだままの状態です還元されており、スサ入り粘土を貼り付けた痕跡はないが、天井部は補強を目的としてスサ入り粘土を貼り付けたものと思われる。床面は還元色（青灰色）によく焼けてしまっているが、時を隔てて使用した痕跡はなかった。この時期の窯は、他の窯跡群でも同じく、器種、器形に統一化がみられ、大量生産された時期であり、燃料の効率を良くするために焚口がハの字形にひらき、床面の傾斜角は急角度となる。またその操業期間も、はげしい燃料消費のため短期間となり、樹木の豊富な丘陵へ点々と拡大したものと考えられる。

篠窯跡群では、上述の登窯の他に、黒岩1号窯、前山2・3号窯、小柳4号窯で平面が三角形を呈した平窯を検出している。この三角窯は、丘陵斜面に直行して、頂辺の一辺を煙道部、底辺の二点を焚口部として構築されている。

窯体の規模は、一辺の長さ1.5～1.8m、床面傾斜角8～10度、焚口部幅30～36cm、焼成部面積1.2～1.9㎡である。天井部はすでに消滅しており、その原形を測ることはできないが、側壁の湾曲より考えて2m前後の高さでドーム状に覆っていたものと推定する。

この三角窯を最初に検出したのは、昭和52年度に調査を行った黒岩1号窯であった。窯体内からは須恵器とともに、緑の釉薬が塗られた緑釉陶器が20数個体分出土し、緑釉焼成窯として初の発見であった。以来、京都市西京区大原野の石作窯跡や、前山2・3号窯の同型の窯体より緑釉陶器が出土している。しかしこれら三角窯の全てが緑釉焼成窯^(註3)というわけではない。昭和55年度調査を実施した小柳4号窯の窯体からは緑釉陶器や無釉陶器^(註4)の出土はなく、水挽き整形された薄手の須恵器が出土し、また兵庫県西明石市の魚住窯跡^(註4)では炭焼窯とも現在考えられている。このことから、これら三角窯は、時期的な窯体変遷途上の特異な一形態とも考えられ、なぜ焼成面積の非常に少ない窯体が必要であったのか、また、須恵器焼成に必要な1100度という高温に達せられたかなど、三角窯には問題点が多い。

さて、工房跡（作業場跡）の調査は、窯跡の工人集団の形態を知る上で不可欠な調査である。昭和55年度に実施した西長尾C地区作業場跡の調査は、今後工房跡や住居跡を解明する上で、その指標となる調査であったが、カマド状遺構や柱穴群を検出した以外に、顕著な遺構は発見されなかった。昭和52年度黒岩地区の試掘調査で検出した石組状遺構は、

大規模な工房跡・住居跡として注目される。

この地点は丘陵谷間部の緩やかな斜面にあたり、その空間部は1000㎡を越す広がりを持ち、今後の発掘調査が期待される地点である。

3. 篠窯跡群から出土する須恵器は、杯身・杯蓋・椀・皿・瓶・壺・甕・硯など多器種に及び、その時期幅も古墳時代後期から平安時代後期に比定されるものまでである。特にその中でも、奈良時代末葉から平安時代初頭に属するものが圧倒的に多く、篠窯跡群の発展途上において、奈良の都から長岡京を経て平安京に遷都された時期における窯跡群は一大画期を迎えるのである。すなわち、新技術の到来、消費地（供給地）の拡大により窯業生産が飛躍的に発展したものと考える。

また、篠窯跡群から出土する須恵器には、宮殿や官衙に関係の深い緑釉陶器や円面硯などがあることから、篠窯跡群は、丹波の一地方窯としてではなく、平安京と深い関連のある窯業生産地であったと考えられる。篠窯跡群で生産された須恵器は、老ノ坂峠を越える山陰道や保津川下りで有名な大堰川の水運によって平安京に運ばれたと考えられ、今日平安京域内の発掘調査では、篠窯跡産と思われる須恵器が多数出土している。

以上、国道9号バイパス予定地内における篠窯跡群の概要を簡単に説明したわけであるが、篠窯跡全体から見れば部分的な調査であり、その全体を把握したわけではない。

今後、篠窯跡群全体の調査が行われ、かつ集積された膨大な遺物が統合整理された時点でその実態が解明されるものと確信する。

(水谷寿克=当センター調査課調査員)

注1 「篠古窯跡研究会」(代表 永田信一氏) 昭和53年12月より、休日や祭日を利用して篠窯跡群の全体的な分布調査をしておられる。

注2 安井良三「古代窯業」(亀岡市史) 昭和29年1月王子A号瓦窯跡が調査された。

注3 無釉陶器とは、形態・手法は全く緑釉陶器と同じであるが、釉の塗られていない土器である。

注4 昭和56年3月、平安博物館が行った発掘調査。寺島孝一氏に現地を見学させていただいた。この種の窯の性格については、現在検討中とのことである。

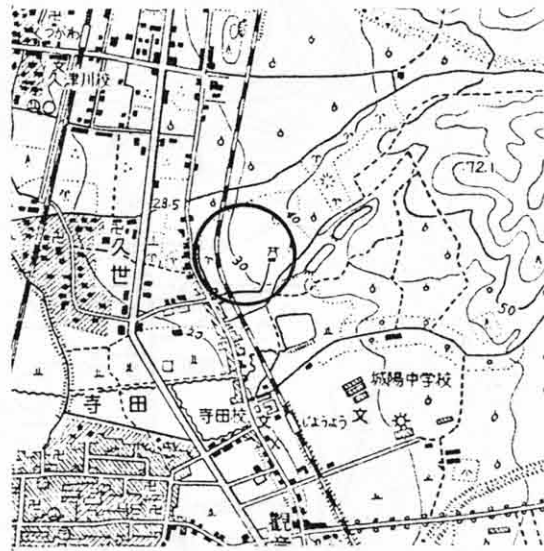
久世廃寺

近藤義行

久世廃寺は城陽市大字久世小字芝ヶ原に所在する奈良時代の寺院跡で、東西にのびる丘陵の西端に位置する。付近には、東南の台地上に奈良時代の久世郡衙と推定される正道官衙遺跡や北方には平川廃寺、山城最大の規模を有する久津川車塚古墳などがあり城陽市内でも遺跡の集中する地域である。

寺院跡の所在する丘陵西端部は、本殿が重要文化財の指定を受けている久世神社の境内となっていて、樹木が繁茂する平坦な地形をなし、西側には国鉄線が境内地を切って南北に走っている。

この久世神社境内地一帯に古瓦の散布することは、早くから研究者の間で知られ、寺院跡の存在することが推定されていた。しかし、文様瓦が見られないことから時期等詳細は明らかでなかった。



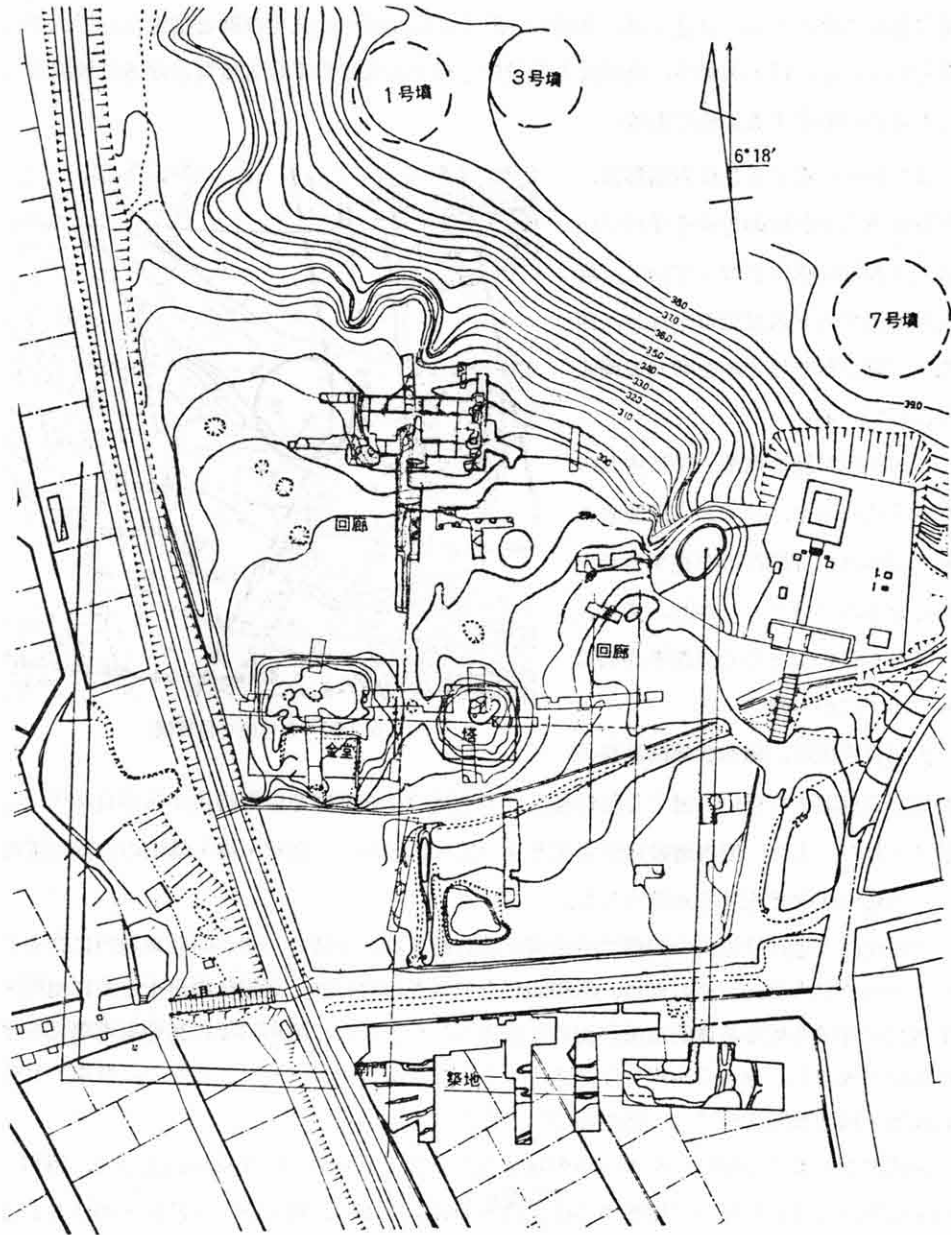
第1図 久世廃寺位置図

山田良三氏は、昭和42年国鉄線の西側で発掘調査を行い、出土した軒瓦より本寺院の存続期間を白鳳時代から奈良時代末と推定された。また、境内地の地形実測と瓦の散布状況から、金堂・塔・講堂の位置を推測し、法起寺式伽藍配置を想定された。

その後、久世神社境内の南側で宅地開発が計画され、寺域の一部が同計画地内に含まれることが予想された。そのため、昭和50年事前調査が行われ、金銅仏の出土と共に南門・築地など寺域を知る具体的遺構が初めて確認された。また、昭和54年に築地東南隅部を事前調査で確認し、寺域の規模をほぼ知ることができるようになった。しかし、堂塔の具体的規模・構造は明らかでなく推測の域を出なかった。

城陽市教育委員会では、久世廃寺の具体的保存を図る資料の作成を目的として、昭和54・55年の両年にわたって伽藍中心部の発掘調査を実施し、塔・金堂・講堂・回廊などを明らかにすることができた。以下、調査の成果を紹介したい。

〔南門跡〕 久世神社参道の南，国鉄線沿いに位置するため全容は確認できていないが，地山を削り出した北へのみ張り出す基壇基礎が検出されている。基壇の南辺は溝で画すが，北辺は溝はない。基壇の規模は南北幅4.3m，東西隅12m（推定）であるが，基壇上面は削平されていて柱位置は明らかでない。なお，南門北側の瓦溜りより奈良時代後期の金銅仏が出土している。



第2図 久世廃寺遺構実測図

〔中門・回廊跡〕 遺構の遺存状況が悪く規模・構造・位置関係など確定できていない。塔の東方で回廊の一部を検出している。溝の存在によって確認したものであるが、復元される回廊基壇の幅は約8mである。また、仮定中軸線から検出した回廊東溝までは約44mあり、これを西に折り返すと東西の回廊域は約88mと復元される。

〔塔跡〕 境内に遺存する2基の土壇の内、東側の土壇が塔跡である。高さ約1.1mの基壇が遺存している。その上面は削平されていて礎石は見られないが、礎石据付痕を4か所検出している。それより復元される初層一辺は6.4mで、脇間2.15m、中央間2.1mとなる。心礎は確認していないが、地下式と考えられる。

基壇は、基礎に掘り込み地業を行い築成されたもので、その範囲は東西13.7m、南北13.4mである。築成土は叩き締めが充分でなく、版築面の間隔も広いものであった。基壇化粧は遺存していないが、瓦積みであったと考えられる。瓦積みの構造については確証に欠けるが、基壇の周囲に平瓦を立て並べた痕跡が検出され、これが掘り込み地業の範囲とほぼ一致することからみて、平瓦を立てて地覆としその上に半截平瓦を積み上げたものと考えられる。以上により復元される塔基壇一辺は13.4mである。

階段は北辺・南辺でその痕跡を検出した。基壇縁よりの幅は1.2～1.3mであったと考えられる。

〔金堂跡〕 高さ1.14mの基壇が遺存する。後世の攪乱によって基壇上面・周囲の遺存状態が悪く、東辺で瓦積みを確認したにとどまっている。瓦積みの構造は、地覆に相当するものがないが、基壇の周囲に幅40cm、深さ18cmの溝を掘りその中に



第3図 金堂基壇東辺瓦積み

砕いた瓦をつめて瓦積みの基礎とし、その上に半截平瓦と平瓦を横積みしている。調査の結果復元された基壇の規模は東西26.7m、南北21.3mである。基壇上面は一部を調査したのみであり建物の平面規模は明確でない。

なお、金堂基壇東辺と塔基壇西辺とは8.9mの間隔しかなく、平川廢寺の8.6m、高麗寺の8.27mに近似していて興味深い。



第4図 講堂階段

〔講堂跡〕 塔・金堂跡の北方に位置する。基壇は東西23.5m・南北13mの瓦積み基壇である。瓦積みの遺存状態は悪く確認したのは南辺と東辺の一部であった。瓦積みは、地覆に相当するものはなく整地面より半截平瓦及び丸瓦を積み上げて

いる。また、北辺では瓦積みは認められず幅2m、深さ55cmの溝が設けられている。

階段は、基壇南辺中央部に構え、瓦を並べた簡素なものである。規模は幅3.6m、奥行40cm、高さ15cm1段である。階段取付の基壇縁辺には完形の平瓦をあてている。また、階段中央部から南にのびる幅72cmの瓦敷きの通路が付されている。

講堂建物は、四面を掘立柱、内部を礎石とする特異な構造をもつ。建物は完掘していないが、検出した側柱(11カ所)はすべて築上面より掘り込まれた掘立柱であった。掘形は一辺1~1.7mで、掘形内は硬く叩き締められており基壇築土よりも硬い。身舎部分では柱穴は検出されず硬く叩き締めた築成土のみであった。以上により復元された建物規模は、7間(21m)×4間(10.5m)の四面廂で、柱間寸法は桁行が廂部分2.625m・身舎部分3.15m等間、梁行が廂・身舎共2.625m等間である。建物の軸線は塔・金堂と異なるが、講堂心との中点を結ぶ線は講堂の方位と一致する。講堂造営に際し塔・金堂が基準になったと考えられ、軸線の異なるのは建物の造営時期の差を示しているのであろう。これに関連して、塔・金堂の基準尺が29.67cm(基壇間の距離8.9mを30尺として)想定されるに対し、講堂では各部の寸法がこの基準尺では完数値を得ることができない。むしろ、平川廃寺の基準尺(28.67m)でまとめることができるのは興味ある点である。

〔寺域〕 寺域を画する遺構は南、東面で築地が検出されている。両側に素掘りの雨落ち溝を伴う幅3~3.4mの築地基底部である。南面築地は、東西の中軸線より南66mにあり、地形的にも自然地形がこれより南に傾斜しており丘陵の南縁部に位置することがわかる。東面築地は、南北の中軸線より東へ57mの位置にある。

西・北面については、遺構は検出しておらず外郭を明示することはできないが、先に説明した南・東面の築地や講堂の位置関係、地形から概要を知ることは可能である。つまり、

西限は中軸線より東築地までの距離を西に折り返した位置が丘陵西端部にあたること、北限は講堂の背後に丘陵がせまっており、これより北に築地等を求めるのは困難である。以上によって、寺域は東西約132m、南北約114mの範囲が想定できる。また、地形的にみても寺院の位置する丘陵南側は、北から南にゆるく傾斜する平坦地となっているが、西側は国鉄奈良線より西方42mで急な崖となりその裾を旧奈良街道が走っている。北は講堂跡の背後に丘陵がせまっているし、南は南門とそれにとりつく築地が丘陵南縁上にのることが指摘され、先に想定した寺域は精一杯の規模と考えられる。加えて、この寺域を確保するために高位を削平し低位に整地したことは、整地土中に古墳時代の土器片や埴輪片を含むことや下層より削平されたカマド跡、竪穴住居（南門付近）が検出されていることから知ることができる。

〔伽藍配置〕 寺域内における主要建物の配置をみると、塔・金堂を東西に並置しその北方に講堂を配するいわゆる法起寺式の伽藍配置をとる。しかし、回廊は東辺部を確認しているにすぎず、講堂の両脇にとり付くのか、前面でとして塔・金堂を区画するのかは明らかでない。一般的に法起寺式であれば講堂の両脇にとり付くが、限られた調査面積であるが講堂にとり付く状況は認められておらず、現状では前面でとしていた可能性が強い。

最後にこれまでの調査の成果をまとめておきたい。

1. 寺域はほぼ方一町であるが、背後は自然地形に制約されて北限は明示できない。
2. 伽藍配置は法起寺式である。
3. 塔・金堂の軸線の方位は講堂の軸線と異なっている。これは、造営時期の差と考えられる。
4. 講堂は掘立柱と礎石を併用した建物で、規模も7間間であるが小さいものである。
5. 廃絶の時期に関しては、講堂掘立柱柱穴より出土した土師器の年代より9世紀前半と考えられる。
6. 寺院の下層より古墳時代の竪穴住居やカマド跡が検出され、さらに整地土中にも古墳時代の土器類を含むことから、寺院造営前に古墳時代後期の集落跡が存在したことが知られる。

（近藤義行＝城陽市教育委員会）

参 考 文 献

- 山田 良三「栗隈県寺院址の歴史的背景」(『花園大学研究紀要』創刊号, 昭和45年)
 城陽市教育委員会「城陽市埋蔵文化財調査報告書」第4・9・10集

恭仁宮跡の発掘調査について

中谷雅治・大槻真純

1 はじめに

和銅三年(710)の平城宮遷都から30年が経過した天平十二年(740)に、聖武天皇によって突然に遷都が発表され、急拠、造営工事が始められた恭仁宮は、藤原氏一族の相次ぐ病死、広嗣の乱などの大きな社会的・政治的変動の後の、いわゆる激動の時代に、突如として登場したのではあったが、結局は、天平十七年(745)までの短命の都であった。しかも紫香楽宮の造営工事との関係で、天平十五年には恭仁宮の工事が停止されたために、実際には、この宮において政治が行われたのは、さらに限られた期間であったと言える。その後の恭仁宮は、『続日本紀』天平十九年九月二十九日条に「恭仁宮の大極殿を国分寺に施入す」とあるように、国分寺として、その役割の変更を余儀なくされたのであった。

恭仁宮の位置については古くより論議されているところではあるが、『続日本紀』・『万葉集』等の記事や先学諸氏のこれまでの研究成果によって、現在の京都府相楽郡加茂町大字例幣周辺が、宮跡に比定されている。この地には、現在山城国分寺の金堂跡および塔跡の立派な基壇が遺存しており、『続日本紀』などの記事との関連から、これまででもこの金堂跡こそが恭仁宮の大極殿跡と考えられていた。またこの周辺は、昭和32年7月1日より山城国分寺跡として国の史跡に指定されているが、特に塔跡は付近の田圃と調和して、のどかさをも出し出している。現在のところ、史跡地内は開発の手からのがれているが、特に指定地内の保存対策を明らかにしてほしいという地元からの要望があることと関連して、国分寺の前身である恭仁宮の様相を明らかにする必要性が生じたために、京都府教育委員会が、昭和48年度より発掘調査を継続して実施している。

2 調査の経過と成果

恭仁宮の調査は、昭和48年度より開始された。初年度は、文献および関連資料収集、現地表面での遺物の散布状況を把握するなどの基礎資料の作成が主な内容であった。翌49年度には、初めて発掘の鍬が入れられたことでは画期的な年であったが、この時の調査地が土木工事に伴う場所であった関係で、結果的には恭仁宮の造営に関して破壊されたと考えられる1基の古墳が検出されただけで、建物跡等の具体的な遺構は発見されなかった。しかしこの古墳は、直径18mを計る円墳であって、周囲には幅2mの周濠がめぐらされてい

たものの、この周濠内には約1mの間隔で配置された埴輪を覆う状態で葺石が転落・堆積していたが、その葺石上に恭仁宮時代に位置づけられている須恵器の壺が安置され、それを覆うように粘土の埋土が検出された。このことは宮域の造営に際して古墳が破壊され、一種の「まつりごと」が行われていたことを暗示するかのようでもあった。

一方、昭和50年度からは、いよいよ他の宮の殿舎配置等を考慮して、計画的に調査地を選定して発掘調査が進められるようになった。この年の調査は、恭仁宮大極殿に比定されている土壇を参考として、大極殿院回廊・内裏回廊等の検出に努めたものではあったが、結果的には平城第2次朝堂院プランを基準とした関係からか、特に顕著な遺構は確認できず、山城国分寺の衰退後に放棄されたと考えられる瓦類の出土があっただけである。このことは現在の田圃にレベル差がかなりあるため、後世の削平によるものか、あるいは造営工事の進展状況・プランの違いなどに拠るかは、この時点で判断できないことであった。そこで翌51年度では、将来的に発掘調査の基準となるところの大極殿の中心線を明確にするために、国分寺の金堂跡と言われている土壇の一部を発掘した。その結果、第5図に示したとおりの大規模な基壇の上に、9間×4間の大きな建物の礎石跡を13か所にわたって確認することに成功した（S B5100）。

これだけの規模の建物と言えば、国分寺金堂としてはきわめて特異であるところから、これこそが恭仁宮の大極殿であったと断言できるものであり、後に寺の金堂としてそのままの状態でも利用されていたことが推定できる。しかし、基壇の正面階段が石積みであったり、また基壇の化粧が瓦積みであった点などは、大極殿のそれとしては不相応であるが、

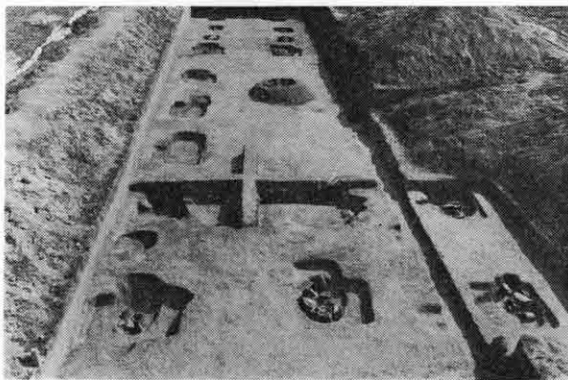


第1図 大極殿正面中央階段（南西から）

これだけが国分寺時代の造作として考えれば、納得のできるものであろう。『続日本紀』の記事からすれば、この大極殿は、歩廊とともに平城宮から移築されたものであるが、歩廊については、後世の削平がきわめて顕著であるために、明確な形で遺構を検出するまでにはいたっていないが、遺存していたところの建築当時の足場杭の配列状況から判断して、大極殿の中心線から東・西それぞれ200尺(60m)の線の近くに設けられていたらしい。また、平城宮から大極殿をはじめ、建物が移築される際に、当然のことながら瓦類も運ばれてきたのであったが、発掘調査の結果では、大極殿に限っては、そうした古い瓦を葺いたのではなく、新調した瓦でもって全面が葺かれていたのに対して、すくなくとも歩廊は、運ばれてきた古い瓦が、軒先を飾っていたことが明らかとなった。

一方、大極殿の北西域においては、大極殿の中心線から西へ300尺(90m)の線に一致して、南北に並ぶ1本の柱列の跡が検出された(S A 5303)。この位置は、平城宮などでは内裏の外郭の西面回廊に相当するのではあるが、当宮跡においては回廊跡の痕跡は無く、一部に通路部を有した塀が設けられていたことになる。

しかしながら、大極殿の中心線を基準としてこれと対称する東側300尺の線上には、こうした柱列が認められなかったことから、この塀が単に回廊に代わるものと考えすることはできない。したがって、この塀の性格付けについては慎重にならざるを得ないが、しかし恭仁宮の内裏の位置を推定する手がかりとして重要なものである。また先の塀の東側には、東西棟の南・北両面に廂を有する掘立て柱の建物跡(S B 5303)が、そして、大極殿北東域においては、いずれも東西棟で、柱筋をそろえる四面廂および南北二面廂の2棟の掘立て柱の建物跡(S B 5501, S B 5507)が遺存していた。特に後者の内の四面に廂を有する建物跡には、床張りの柱跡までが検出されているところから、宮内の重要な建物の一つであったにちがいない。しかし、これらの建物の柱跡には、いずれも柱を抜き取った痕が顕著

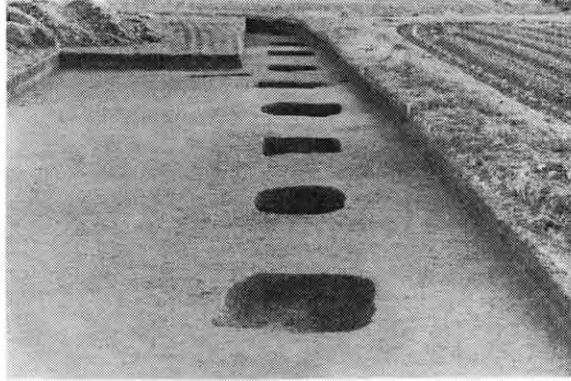


第2図 建物跡 S B 5303 (西から)

に残っており、しかも抜き取った穴の中には恭仁宮時代の土器・瓦が投棄されていた。このことからして、これら3棟の建物は、建築後間もない時期に解体され、他所に移築されたものと判断されるころであるが、これら3棟の建物に限らず、この宮跡が後に国分寺として再利用される際には、寺に

は不要な建物などは解体されたのであろう。

恭仁宮の中心殿舎の内でも、最も調査の遅れているのが、朝堂院域である。大極殿の南方域の一带は、その北方域と比べて、その地形は一段と安定し、田地の畦割りにしても比較的安定しているところから、朝堂院関係の遺構の遺存状態は、良好であるとの見方が多



第3図 柵跡 S A 5303 (北から)

くを占めていた。ところが、今日迄の調査結果では、地表面の削平が予想以上に大きく、昭和53・54年度における国分寺の南門・南面築地の跡を検出した際には、その最底部がわずかに遺存していたにすぎない。そうした関係からか、朝堂院についての発掘成果は乏しく、今日迄に確認した遺構と言え、1列の柵跡(S A 5501)だけである。したがって朝堂の建物跡は言うに及ばず、その基壇等の手がかりさえないのが実情である。もっとも、上の柵跡が、大極殿の中心線から200尺(60m)の線上にほぼ一致し、その様相が先に触れたところの大極殿北西の柵跡(S A 5303)のそれに酷似しているために、他の宮の朝堂とは異った施設が配されていた可能性も無くはないが、それにしても今後の調査結果を待つて判断しなければならない現状である。

3 おわりに

恭仁宮が占地する瓶原地域は、北・西・東の三方が山で囲まれ、南だけが開けていると言っても、宮域のすぐ南には泉川(現木津川)が東西に流れている。したがって、約1km四方の宮域(推定)だけが、わずかにその空間地を占めているといっても過言ではないほどである。この地域は、北西から東南に傾斜する複合扇状地であるところから、せまい空間地と言っても非常に起伏が著しく、およそ宮域としては適していないと言える。したがって、今日でも段差の著しい地形を呈しているが、わずかに推定される大極殿院および朝堂院域だけがほぼ南北に細長い平坦な部分を占地している。そのために、平城宮などで見られる官衙地域は、この恭仁宮域では、きわめて傾斜・段差などが著しい地帯に相当することになるために、他宮の様相とは大きくちがう建物配置が採られていた可能性が高いと言える。また、はじめに触れたとおり、恭仁宮の造作が途中で停止されているために、工事がどの程度進んでいたかが明らかでない。したがって、地形の特殊性・工事の進捗状況



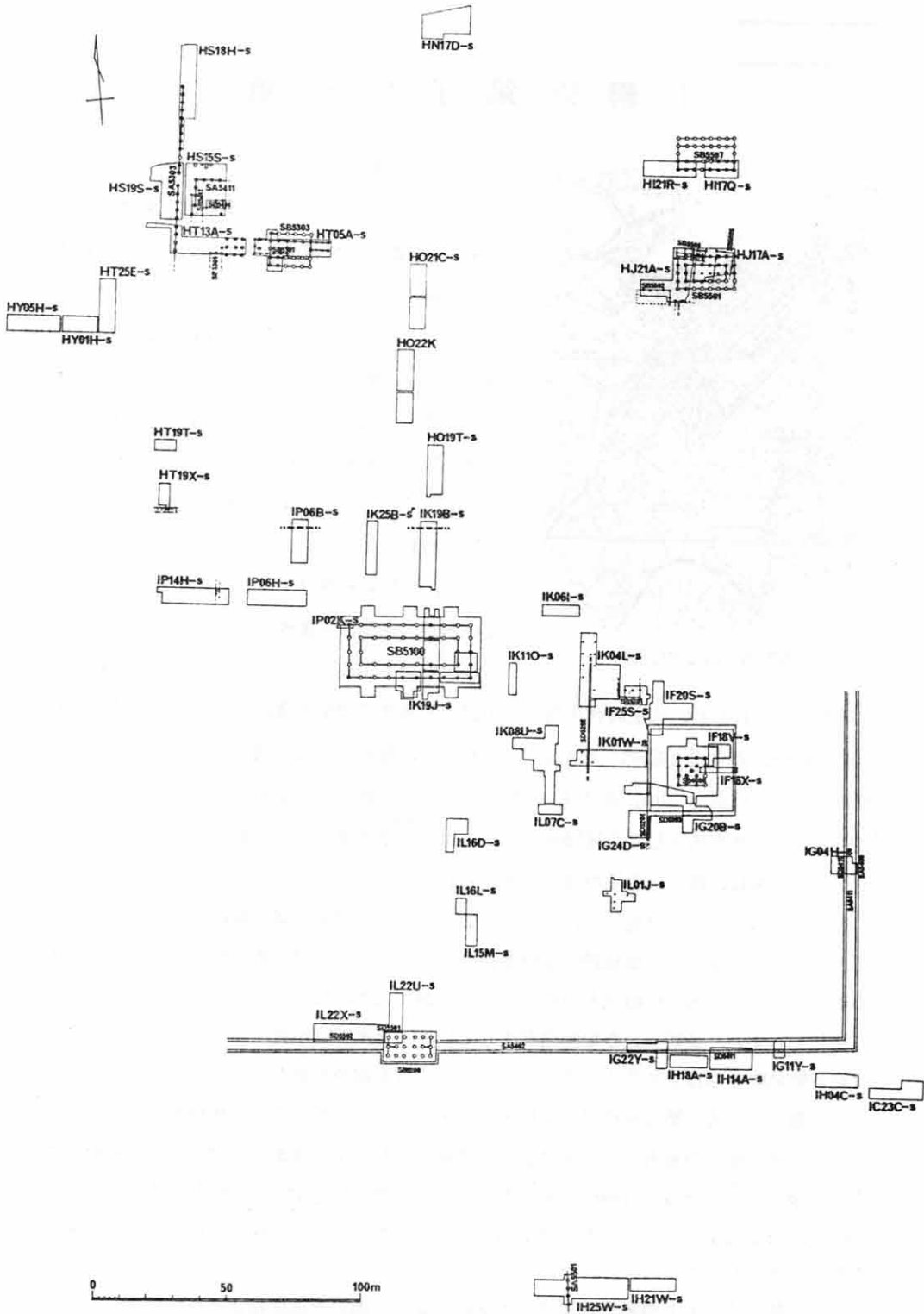
第4図 恭仁宮大極殿創建時の瓦

の両面からして、調査結果の判断・性格付けが容易ではない。事実、大極殿の北西に当たる柵跡(SA5303)の性格付け、さらには、朝堂院域における柵跡(SA5501)のそれなどは、いずれも速断が許されるはずもなく、恭仁宮跡の発掘調査の困難さを如実に物語るものである。

一方、一連の恭仁宮跡の発掘調査によって、国分寺に関する調査成果も見逃すことはできない。先にも触れたように、国分寺の金堂は、大極殿をそのまま継承したものであり、またそれを取り囲む回廊にしても、同様であったことが明らかとなった。また塔にしても、現存する礎石群が、金堂から100m以上も離れていることは、すでに存在していた回廊を考えての配置であったことに因るものであり、しかも、塔院を画する築地塀の存在したと、およびそれが100尺(30m)を基準とした方格規制に基づいていることも、恭仁宮のそれを引き継いだことに因るであろうことなど、次々と明らかになってきた。さらに、国分寺の寺域の東限および南限の築地跡、南門の位置が明らかになったことにより、その北限が推定できるようになったことも、大きな成果の一つと言えよう。

以上のように、一連の発掘調査は、恭仁宮・国分寺の両面の究明に大きく役立つものではあるが、国分寺の前身である恭仁宮が、いろいろな面で、他の宮と様相が異なるところから、将来永くにわたって調査が継続され、一步一步解明されていくことを願ってやまない。

(中谷雅治=京都府教育庁指導部文化財保護課記念物係長)
(大槻真純=当センター調査課調査員)



第5図 恭仁宮・山城国分寺主要遺構配置図

府下遺跡紹介

1. 網野 銚子山古墳



網野銚子山古墳位置図

国鉄宮津線網野駅から北へ約1.2km。網野の町並みを見下ろす丘陵の先端に築かれた網野銚子山古墳は、京都府下で最大であるのみならず、日本海沿岸地域の中にあっても最大の規模を誇る大前方後円墳である。墳丘は全長195m、後円部径115m、高さ17.5m、前方部幅65m、高さ13.5mを測る三段築成の大規模なものであり、各段の平坦部と墳頂部には埴輪が、斜面には葺石が存在したことが確認されている。また、幅30~40mの周濠の痕跡も認められる。

現在、墳丘の西側はすぐ近くにまで住宅が迫っているが、東側の丘陵地一帯は畑地が広がり、のどかな風景を保っている。その中には、昭和51年

に発掘調査が行われ、弥生時代後期から中世に至るまでの集落遺跡であることが確認された林遺跡や、弥生式土器片、土師器片、須恵器片の散布する三宅遺跡が含まれる。また、後円部の南には直径20m、高さ4.5mの円墳である小銚子古墳があり、前方部の北東には、凝灰岩製の石枕が出土した直径25m、高さ4mの寛平法皇塚かんびやうほうおうと呼ばれる円墳がある。これら2基の円墳は、銚子山古墳の陪塚と考えられている。

銚子山古墳前方部には登り口があり、そこから前方部頂部を経て後円部まで歩いて行くことができる。登り口には網野町教育委員会によって説明板が設置されている。この古墳の墳丘上には、以前、松の巨木が林立していたが、近年、松喰い虫のため2~3本を残して枯れてしまい、景観上大きな変化が生じている。後円部は平坦でかなり広く、ここからは網野町の町並みはもちろんのこと、八丁浜から日本海をも臨むことができる。

この銚子山古墳の築造年代は、立地・外形・規模から判断して4世紀後半頃と推定されており、丹後地方の最も古い古墳のひとつに数えられる。丹後地方には、他にも加悦町白米山古墳ぎやま、蛭子山古墳えびすやま、丹後町神明山古墳しんめいやま、弥栄町銚子山古墳、峰山町杉谷古墳など全長100~190mの前期の大型前方後円墳が存在する。当時、大和の政権に匹敵するような勢力が丹後にあったと考えることができよう。

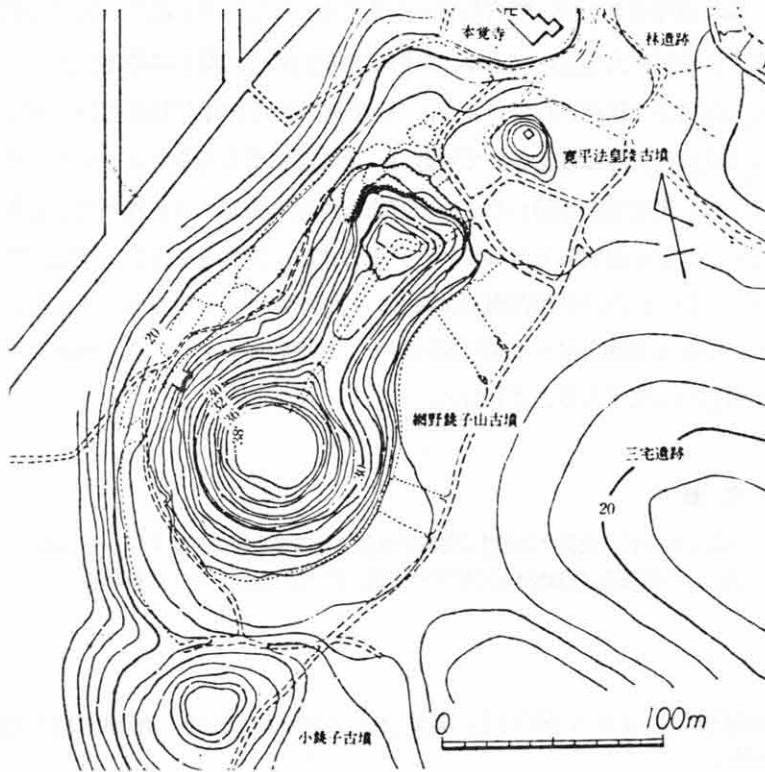
なお、銚子山古墳と小銚子古墳は、大正12年3月に国の史跡に指定されている。

参考文献

梅原 末治「銚子山古墳」『京都府史蹟勝地調査会報告第1冊』大正8年



網野銚子山古墳全景(東から)



網野銚子山古墳地形測量図(『同志社考古』10による)

府下遺跡紹介

2. 浜 詰 遺 跡

地図を広げて見ると、京都府は南北に長く6つの府県と接している。海に面した府県としては接する府県が最も多く、京都府の特性をあらわしている。今回、紹介する浜詰遺跡は山陰海岸国立公園の範囲に含まれ、京都府でも北端部に位置する。行き方は国鉄宮津線の丹後木津駅から北へ徒歩で約15分、山陰本線では豊岡駅で乗り換えて4つめの駅である。

立地は京都府竹野郡網野町浜詰小字雨ごい山、くりの山の台地約200m四方にあり縄文時代後期の遺跡として知られている。古くは『竹野郡誌』に^{まさかり}鉞濱と記されている。遺跡として公にされたのは、大正14年梅原末治氏による『京都府史蹟勝地調査会報告第6冊』が最初である。発掘にいたる経過は、昭和33年、木津、上野の松本岩治氏所有の畑から、貝がらや土器片等が出土することから、松本氏の次男で当時、橘中学生松本邦光氏が宮ノ下遺跡の出土土器によく似ているので、同志社大学に連絡をとり、教育委員会・橘中学校の協力のもとに、酒詰仲男教授が中心となって発掘が行われた。

調査結果は、貝塚を3か所、竪穴住居跡1基を検出している。遺物は縄文時代前期から後期の土器片を多量に出土し、又石器、骨角器や動物の骨、貝がら等も出土している。遺物は同志社大学に多く保管されているが、一部は現在でも橘中学校に保管されている。

発掘された竪穴住居跡は復元されて屋外展示され誰にでも見ることができ、その中にもはいれる。今回、復元住居を訪れたさいの写真が右のものである。現状では長年の風雪のため、いたみがひどく説明板も倒れていた。屋外に展示されることは、遺跡、遺構を語るうえでは好ましいが、管理や保存面では難しいことを今さらながら知らされた。遺跡地を含め、周辺一帯が住宅地となっており環境とそぐわない面もあり、あらためて、周囲の情况进行了るべき保存が必要であると思われる。

参 考 文 献

- 梅原 末治「浜詰村ノ史前ノ遺蹟」『京都府史蹟勝地調査会報告』第6冊 大正14年
岡田 茂弘「京都府浩詰遺跡発見の竪穴住居址」『先史学研究』1 昭和34年

付 記

今回の報告にあたっては、橘中学校、網野高校、網野町教育委員会、網野町立郷土資料館の御協力を得た。



浜詰遺跡位置図



浜詰復元住居

センターの動向

1. できごと（3月～7月）

- 3.25 京都府教育委員会により「財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター」
設立許可さる。
- 3.27 第1回理事会開催
- 4. 1 業務開始
- 5. 6 千代川遺跡（亀岡市）発掘調査開始
豊富谷丘陵遺跡群（福知山市）発掘
調査開始
大内城跡（福知山市）発掘調査開始
- 5.10～11 日本考古学協会総会出席（松井，
竹原，山口，小泉調査員）
- 6. 3 篠窯跡群（亀岡市）発掘調査開始
- 6. 6 長岡京跡右京第76次（長岡京市）発
掘調査開始～7.25
- 6.24～25 全国埋蔵文化財法人連絡協議会
一札幌一出席（栗栖事務局長，安田主
事）
- 6.29 昭和56年度職員採用試験実施
- 7. 6 木津遺跡（木津町）発掘調査開始～
7.22
- 7. 9 広隆寺跡（京都市右京区）発掘調査
開始
- 7.13 園部城跡（園部町）発掘調査開始
- 7.17 土師南遺跡（福知山市）発掘調査開
始～7.25
- 7.28 千代川遺跡（亀岡市）現地説明会実
施

2. 人事異動

- 4. 1 白塚弘総務課長，堤圭三郎調査課長
京都府教育委員会から派遣さる。
松井 忠春，久保 哲正，長谷川 達，
辻本和美，大槻真純，伊野近富，水谷
寿克，石井清司，山口博，村尾政人，
竹原一彦，小泉信吾，引原茂治，増田
孝彦，田中彰（以上調査課調査員）安
田正人，塔下麗子（以上総務課主事），
中西修（総務課嘱託）採用さる。
- 4.17 栗栖幸雄理事，常務理事，事務局長
に任命さる。
- 7. 1 石尾政信，竹井 治雄，戸原 和人，
小山雅人，久保田健士（以上調査課調
査員）採用さる。
- 7.16 原口正三氏，理事に任命さる。

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

組織および職員一覧

理事長

福山敏男 (京都府文化財保護審議会委員)
(元京都大学教授)

副理事長

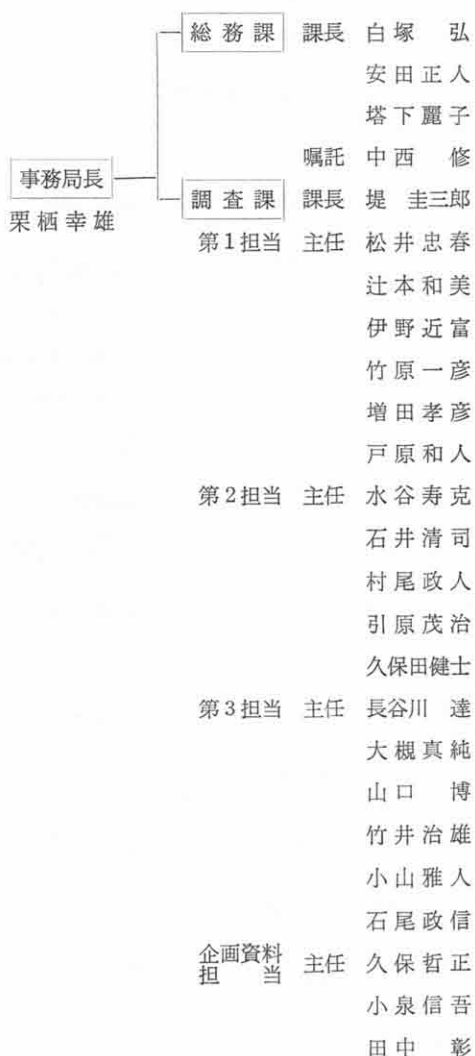
樋口隆康 (京都府文化財保護審議会委員)
(京都大学文学部教授)

理事

- 栗栖幸雄 (常務理事, 事務局長)
- 岸俊男 (京都大学文学部教授)
- 藤井学 (京都府立大学文学部教授)
- 川上貢 (京都府文化財保護審議会委員)
(京都大学工学部教授)
- 足利健亮 (京都大学教養部助教授)
- 中沢圭二 (京都府文化財保護審議会委員)
(京都大学理学部教授)
- 佐原真 (奈良国立文化財研究所
埋蔵文化財センター研究指導部長)
- 原口正三 (大阪府立島上高等学校教諭)
- 藤田价浩 (財団法人京都古文化保存協会)
理事長
- 井上裕雄 (京都府文化芸術室長)
- 城戸秀夫 (京都府教育庁指導部長)
- 東条寿 (京都府教育庁指導部
文化財保護課長)

監事

- 前尾有人 (京都府出納局長)
- 中村義明 (京都府監査委員事務局長)



受 贈 図 書 一 覧 (4～7月)

京都教育大学考古学研究会	史想 第16号～第19号
夜久野町教育委員会	京都夜久野の文化財
(財) 古代學協會	古代文化 第268号～第271号
京都大学埋蔵文化財研究センター	京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ(白河北殿北辺の調査)
同志社大学校地学術調査委員会	同志社構内地下鉄烏丸線今出川駅地点の発掘調査
京都府立丹後郷土資料館	丹後の近世絵図(常設展資料1), 丹波荒神塚(同2), 両丹地方の禁制(同3), 京都府の古瓦, 天橋義塾, 丹波夜久野の文化財, 南北朝時代の丹波・丹後, 丹後郷土資料館収蔵資料目録第1集, 丹後郷土資料館報創刊号・第2号, 丹後の守護・守護代
(財) 大阪市文化財協会	難波宮跡研究調査年報1975～1976.6, 昭和53年度難波宮跡緊急発掘調査報告書, 昭和54年度大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書, 難波宮址の研究 第7
城陽市教育委員会	城陽市埋蔵文化財調査報告書第2集, 同第3集, 同第9集
(財) 枚方市文化財研究調査会	出屋敷遺跡調査概要報告(枚方市文化財調査報告 第15集), 枚方市文化財年報Ⅱ
京都大学文学部考古学研究室	考古学 メモワール 1980
綾部市教育委員会	綾部市文化財発掘調査報告 第8集
立正大学熊谷校地遺跡調査室	遺跡調査室年報Ⅰ, 同Ⅱ
立正大学文学部考古学研究室	考古学研究室集報
大津市教育委員会	大津城跡発掘調査報告書Ⅰ(大津市埋蔵文化財調査報告書(1)), 埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書(同(2))
舞鶴市教育委員会	志高遺跡調査概報
京都考古刊行会	京都考古 第1号～第25号 合冊

受贈図書一覧

奈良国立文化財研究所	平城京九条大路（県道城廻り線予定地発掘調査概報Ⅰ）、昭和55年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報、平城宮発掘調査出土木簡概報04、藤原宮出土木簡(5)、平城宮木簡3（奈良国立文化財研究所史料第17冊）、藤原宮木簡2（同第18冊）
長岡京跡発掘調査研究所	長岡京（長岡京跡発掘調査研究所ニュース）創刊号～第20号
京都産業大学考古学部	土盛 第11号
(財) 京都府文化財保護基金	続京都の社寺文化（丹波・丹後）、近畿地方国宝・重要文化財目録、京都の明治文化財第Ⅱ編（美術・工芸）、市民のえらんだふるさと京都写真100景、文化財の知識、古墳・埋蔵文化財、文化財を守る人たち、京の町並、京都の肖像彫刻、京都の江戸時代障壁画、京都の美術工芸（南山城編）、京都の社寺建築（南山城編）、京都の美術工芸（乙訓・北桑・南丹編）、京都の社寺建築（乙訓・北桑・南丹編）
建設省近畿地方建設局京都国道工事事務所	京都国道管内および京都府下の道路発達史
大阪市立博物館	大阪市立博物館報 No.20
石川県立埋蔵文化財センター	宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡発掘調査報告書、金沢市戸水C遺跡発掘調査概報、寺家1980年度調査概報、志賀町米浜遺跡、高堂遺跡第1次・第2次発掘調査概報、鶴来町白山遺跡・白山町墳墓遺跡、能都町藤波二ツ谷1号塚・波並堂の上遺跡発掘調査報告書
京都市考古資料館	京都市考古資料館年報 昭和54・55年度
亀岡市教育委員会	御上人林廃寺 第6次発掘調査報告（亀岡市文化財調査報告書 第11集）
同志社大学考古学実習室園部町遺跡分布調査研究会	園部盆地における考古学的調査（分布調査の成果Ⅲ）
宮津市教育委員会	中野遺跡第2次発掘調査概要（宮津市文化財調査報告3）
峰山町教育委員会	途中ヶ丘遺跡発掘調査報告書（峰山町文化財調査報告 第3集） カジャ遺跡発掘調査報告書（同 第5集） 下山横穴墓発掘調査報告書（同 第7集）

受贈図書一覧

- | | |
|----------------|---|
| 京都市埋蔵文化財調査センター | 京都市内遺跡試掘・立会調査報告, 南春日町遺跡発掘調査概要, 長岡京跡発掘調査概要, 極原廃寺発掘調査概要, 大藪遺跡発掘調査概要, 中臣遺跡発掘調査概要, 北白川廃寺跡発掘調査概要, 平安京跡発掘調査報告, 六勝寺跡発掘調査概要, 鳥羽離宮跡調査概要, 名勝双ヶ岡保存整備事業報告 |
| (財) 茨城県教育財団 | 竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書5(茨城県教育財団文化財調査報告Ⅵ), 南守谷地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(同Ⅶ), 冬木地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書(同Ⅷ), 常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(同Ⅸ), 常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(同Ⅹ), 常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(同Ⅺ), 冬木貝塚産魚種組成と漁撈活動 |
| 長岡京市教育委員会 | 長岡京市文化財調査報告書第5冊, 同第8冊, 下海印寺遺跡第3次範囲確認調査概報(同第7冊) |
| 九州大学九州文化史研究施設 | 九州文化史研究紀要第26号(考古学関係抜刷集) |
| 後藤 佐雅夫 | 京都府史蹟勝地調査會報告 第1冊～第8冊,
京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第10冊～第20冊,
京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告書総目録及索引,
滋賀県史蹟調査報告 第7冊, 第8冊, 鞍馬寺経塚遺宝 |
| 大野 左千夫 | 和歌山市における古墳文化, 花山西部地区古墳, 覆刻社会教育資料(埋蔵文化財調査報告), 和歌山市文化財総合調査報告(1), 史跡鳴神貝塚保存管理計画策定報告書, 伏見城豊後橋北詰の調査, 田辺天神山弥生遺跡(同志社大学文学部考古学調査記録5), 祢宜貝塚調査概報, シンポジウム弥生式文化研究の諸問題, 和歌山市太田・黒田遺跡の調査から, 太田・黒田遺跡範囲確認調査(和歌山港～鳴神線)概要, 背見山古墳発掘調査概報(『古代学研究』第85号 抜刷), 花山古墳 |
| 鈴木 重治 | 相国寺旧寺域内の発掘調査(成安女子学園校地内の埋蔵文化財), 古屋敷遺跡・飯岡横穴発掘調査報告書(田辺町埋蔵文化財調査報告書 第1集) |
| 積 龍雄 | 奈具遺跡発掘調査報告書(弥栄町文化財調査報告書 第1集), 坂野(同 第2集), 邪馬台国への道 |

受贈図書一覧

杉原和雄

史想 第13号～第15号, 国道8号線長浜バイパス 関連遺跡調査報告書Ⅱ, 北陸自動車関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ, 園部垣内古墳調査概報, 山陰の古瓦展, 二見谷古墳群

宇野隆夫

京都府長岡京市カラネガ岳1・2号墳の発掘調査(『史林』64巻3号 抜刷)

真鍋昌宏

香川県埋蔵文化財調査年報 昭和55年度

篠崎 潔

いぶき 12号

京都府埋蔵文化財情報発刊にあたって

当財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、関係各方面より種々御意見を賜り、まがりなりにも4月1日に発足しました。スタートした以上は、このセンターをよりよい方向へと運営して行くのが私たち内部の職員の責務と考えており、今後とも皆様方からの御意見、御指導を御願ひする次第です。そうした点から、この小冊子に関しては、当センターの行う調査の略報、速報といったものだけに限定せず、広く京都府下全域における文化財の調査、研究、資料等の紹介を含めた府下全域の情報交換誌としての役割を果たせたらと考えております。そして、将来的には、研究論文等も盛り込んで研究誌的な側面をも加えて行きたいと思っております。皆様方からの投稿をお願いしあわせて御批判、御指導を御願ひ致します。

(編集担当=久保哲正)

京都府埋蔵文化財情報 創刊号

昭和56年9月30日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル
中御霊町424番地

TEL (075)256-0416

印刷 中西印刷株式会社
代表者 中西 亨

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)